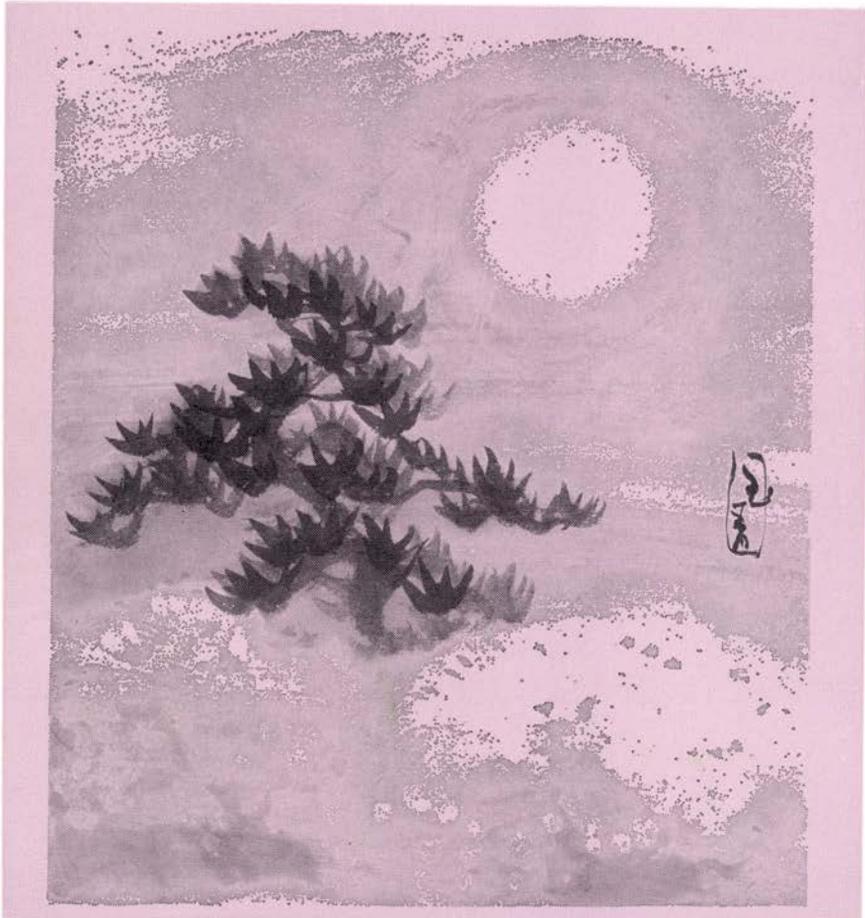


川柳塔

昭和五十一年三月二十五日印刷
昭和五十一年四月一日発行
創刊大正十三年通卷五九九号



日川協加盟

No. 599

四月号

麻生路郎先生の不朽の名著



(普及版)

—A 6 版—

頒価 ¥1,000

(送料共)

「旅人」とその後の作品を百句追加してここに
再現しました。

序 中島生々庵
抜 西尾 栞

52年5月8日発売

編集スタッフ—橋高薫風・谷垣史好・高杉鬼遊
・香川酔々・板尾岳人・不二田一三夫

川柳塔社
「旅人」普及版刊行会

あたたかいご家庭へ、あたたかいおみやげ!

豚 焼 餃子
焼 餃子
又 焼 饅

豚まんの王様、やき豚入り



大 阪・なんば



TEL(641)0551-2



<出張店> なんば高島屋/虹のまち鹿鳴/心齋橋そごう/梅田阪神/天満橋松坂屋
京阪デパート/堂島地下センター/中之島サン・ストア/なんば新川店/奈良近鉄百貨店

日 蟄 啓

今日は3月6日。啓蟄の日。今年はまだまだ風も冷たく残っているし、木の芽の伸びがころなしかにぶって居るようだ。地虫も首をちぢこませて居はせぬか。しかし、年々歳々萬象の変化は正直に蛩音を伝えて来る。啓蟄と聞けば地虫と同じように、冬眠に似た老骨の私も、のそのそと春の陽をたずねて見たくなって来る。流感にも罹からず万歩計さげての日課は、生きていてよかつた欣びを真剣に考えさせられたりもする今日である。

蒲団たたたく音に春の陽の重さ

無気味なやすらぎ底抜けに空が晴れ

うそ笑いもつともらしくうるさ型

脳波解説 医者に傷口なめられる

茶柱に真顔で執念とりもどし

庵 々 生 島 中

号 月 四 塔 柳 川



座右の句

灯台の夕陽 神話を抱き寄せる

(緑之助)

私の句

真情にほだされ仮面揺れ動く

藤田 軒太楼

川柳塔 四月号 目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

啓蟄の日……………中島生々庵……………(1)

デホルムと意外性……………西尾 栞……………(2)

誹風柳多留廿五篇研究……………(十四)……………(24)

清 博美・八木敬一・紀内恒久・青木迷朗・西原 亮
鈴木 黄・室山三柳・入江 勇・岡田 甫

川柳塔 (同人作品)……………中島生々庵選……………(4)

水 煙 抄……………菊沢小松園選……………(28)

麻生路郎物語……………(28)……………東野 大八……………(21)

秀句鑑賞……………(同人吟)……………正本 水客……………(26)

(水煙抄)……………小野 克枝……………(27)

愛染帖……………橘高薫風選……………(36)

51年度各地柳壇賞決定……………若本多久志選……………(51)

デホルムと意外性

西尾 栞

私は絵は下手だが好きである。日本画である。下手の横好きという奴である。その絵を描くのに、デホルムという言葉がある。デホルムとは「ゆがめて曲げて描く」ということである。例えば、ここに壺がある。壺は大抵左右均整のとれたきちんとした姿をしているものである。それを画にするときは、その均整をとれたままを描いては絵にはならない。その壺の左右どちらかの線を、わざと曲りくねらせて描いて自分の個性を入れる。そうすると自分の壺が出来るのである。そこに芸術の面白さがあり、自己主張がある。句や詩にも亦同じことが言えるのである。デホルムこそ個性発揮の一段階である。又日本画には余白というものがある。句にも亦余白というものがある。叙情も余韻もない句は単なる報告である。句には又、意外性というものが非常に効果的である、つまり省略文学の根本である。少しく例を挙げてみる。

引き越しへ後髪ひく桜草 弘 朗
この句の下五の桜草が意外性である、桜草でこの句は生き返ったのである。

立っている時休んでいる馬の足 甲 吉

日本柳壇百人撰 (一九三二年) (38)

第24回大萬川柳大会 (44)

一分間の柳論 (41)

水煙抄について (35)

初歩教室 (48)

大萬川柳「机」 (50)

柳界展望 (52)

大阪へ行きたい (49)

本社三月句会 (54)

各地柳壇 (佳句地10選) (59)

「進 級」 (46)

一路集「花まつり」 (46)

「宇 宙」 (47)

編集後記 (65)

一三夫・岳人 (44)

宮川 珠 笑 (41)

菊 沢 小松園 (35)

本 田 恵二朗 (48)

川 村 好 郎 選 (50)

堀 江 芳 子 (49)

(庸佑・整理) (54)

松 川 杜 的 選 (59)

高 津 徹 也 選 (46)

渡 辺 独 歩 選 (46)

村 田 瓢 太 選 (47)

(一三夫・葉子) (65)

座右の句

なに考えていたのか わが家通り越し
私の句 (一三夫)

ある日フト枯葉と対話してみた
津 田 与 史

この句は勿論芝居の馬の足である、馬の足の意外性が何とも愉快である。

放尿中むじゆんに気付いた会議室 新之助
この句は上五に放尿中ともって来て、中七で時間の間をおいて下五の会議室という意外な言葉で納得させている。

陽の中の十七才よ黄水仙

白 汀

この句も黄水仙という全然意表外のもをもって来て、上の句の印象をうったえている。

平均年令六十みりん干し工場

美 子

朝市でまだ臆病なエビのひげ

同

みりん干し工場が意外性であり、臆病なエビのひげがデホルムである、作者がエビのひげを臆病に描いたところが見所である。

骨揚げが調理士だった著さばき 一三夫

骨揚げが調理士をもつて来た意外性に、箸さばきが効果的である。

幻の山河掌にあり螢籠

不 朽

掌にある幻の山河が、デホルムであり、螢籠が意外性である。

独身万才ベンチで酔いが醒め

史 好

上五の独身万才が中七下五に対する意外性である。

孤独からやっとながれた金魚の死

あいき

蜘蛛の巣に顔なでられた鍵をあけ

綾 女

いずれも下五の意外性で成功している。句会などの短時間の間の選には、この意外性が非常に効果のあるものである、試見られるとよいと思う。



中島生々庵選

呉市 榎田英詩

親子三代昭和生れが出て平和
コンパクト静かに閉じて誰を待つ

浅学非才などと大卒口がすぎ

まな板の鯉定年が近付きぬ

野良犬に子への土産を嗅ぎつかれ

今度こそ男に生れますと妻

岡山市 川端柳子

追えばふり返る野犬の目の哀れ

夢にもう触れず遍路の鈴の音

ここに居てひっそり回わす風車

あの人が心に落書して過ぎる

嘗ての虹 嘗ての乙女とともに褪せ

袖子の香が届いて川柳塔二月

神戸市 仲 どんたく

和尚の散歩にインバネス生き残り

婚期過ぎ同士こらで妥協する

裸木のじつと春待つ御堂筋

妻もあらん子もあらん事故現場

家相などひねくっている溜りかけ

美しく老いたき齡の地唄舞

美祿市 安平次弘道

盆栽が枯れると妻をまず叱り

涙腺がこわれたような泣き上戸

粉飾をした自画像が泣いている

気休めを言うて真心疑われ

なつメロへ夫婦思い出すれ違い

大東市 土岐トク子

嬉しい日心に花が咲きみだれ

よわい指折り亡き母の六十覚ゆ

お百度の老婆は何を祈るらん

子宝の授り願う藤地藏尊

巢立ちゆく息子の青春のひとくぎり(息子東外大卒業)

宇部市 平田実男

道真も苦笑しそうな願いごと

凶のないみくじの末吉でも嬉し

いつからか二級酒となっていた家計
雪景色我が家も捨てたものでなし
薬害を治す薬を飲み続け

大阪市 吉田圭井堂

組であばれる鯉の見にくさよ
意にくわぬ妥協で余生汚すまじ
どこでどう取り違えたか狂い咲き
台風の目にされてゐる受験生
お迎えが遅いとばやきながら灸

東大阪市 竹中肖二

自信過剰歯止めがきかぬ下り坂
逃げの駒置いて陣形整える
真直ぐに生きて美田は残さない
尼寺の風情を添える萩の道
塗り上げた顔を鏡に笑われる

堺市 高橋千乃子

夢二の絵 ほつれた髪が生きている
何の芽かわからぬままに肥しおき
初恋は当て逃げでした深いキズ
恋の使者紙飛行機が窓に来る
野仏のひさを求めてつばき落つ

大阪市 金井文秋

顔出した芽へ嫌われに来る寒波
青春譜学生服でプロローグ
欠点だらけだから退屈せぬ夫婦

ドック入り気になる個所を一つ持ち
低カロリーさがして食べる肥満型

大阪市 河野君子

雪舞うて心の旅路を深くする
生き残る道を選つて鈴の音
梅林坂笑いだるまとなってゆく
許しがたき貌で二月の海は凧ぎ
友眠るひとりひとりの鍵を掌に

(紀南でクラス会)

大阪市 小出智子

風が吹いても雪が降っても愛になる
老齡のかなしさがある父の足
別れたままの母を想えば胃が痛む
ぬるま湯にとつぷり漬つている女
さあ春を迎える眼鏡を拭いている

竹原市 森井菁居

青い鳥抱きひとときの酒に酔う
妻だけに弱音を吐いてピエロかな
四面楚歌救いは飲める口をもつ
約束を背負うて歩幅崩せない
スランプの日々役付きをもてあます

竹原市 山内静水

円満解決すつてんでんになり
いま絶んとすローソクに風おこる
負けまいとしてふり切つた手の温み
有言実行 十年たつて認められ

お互いに歳にはふれぬ身だしなみ

宝塚市

傍島静馬

和歌山市

津田与史

姑を立てて陰口聞流す

七光りどころか子らにおんぶされ

その先を問われて詰る半可通

嫌やな連れまいたつもりがバーで会い

成上り昔仲間をけむたがり

八尾市

大路美幸

倉敷市

小幡里風

妻の目のおだてに廻るコマである

掌を合わす神へ無心になり切れず

盆梅の匂いの中に亡父が居る

一粒の種の未来へ水をやる

磨かれた靴に祈りがこめてある

青森市

工藤甲吉

泉大津市

村上春巳

腹の立つときは如来の眼を思い

ほんとうの話は一度だけ聞かせ

民謡も民話も雪に埋もれる

豪雪を老骨ついに余し

冬の街月天心の下帰る

愛媛県

渡辺暁童

東京都

山根白星

おがみたおしに ころり敗退

見抜かれながら 拙なかけひき

此処は通さぬ 勝手つんぼう

好きというのは 書いて言えない

寝た間にふった 花咲かす雨

イガ栗でとるお手玉をしかと見よ

脇腹を押さえ仮病の堂に入る

場所柄を弁まえていどんぐりさ

貴公子をひと皮むいたことがなし

憂国の志士めき地球儀を廻す

倉敷市

水粉千翁

転がせる銚子に明日が満たされる
身の上をさらけて触れるコップ酒
酔い心地など知るものか孤に耐える
つつがなく酒に負けてる父でよし
ある時を夫婦で分ける酒となり

大阪市 本多柳志

大器晩成かたく信じた日もありし
とどまれば転ぶ外なし不況風
漢方へはなしのわかる聴診器
反論へ反論のペン孤独
自動ドア敵にうしろを見せて開き

鳥取市 河村日満

飲みすぎの君背負うたもなつかしや（Y君逝く）
駅の時計がずぼらしてます春の風
孫がいるから演出の豆を撒く
逃げそうで妻に羽衣織らせない
払わねばならぬ火の粉で引いた弓

米子市 八木千代

弱身見せまい号令をかけて居る
看病にも慣れて要領よく眠り
道あまりひらたく石を蹴ってみる
タッチの差今日も災難すり抜ける
炭火つぎ足して明るい対話しむ

竹原市 鈴木かつ子

咲き初めた梅をかぞえて春を待ち

立ちよれば倅せそうな笑い声
渡り鳥又来ておくれおらが里
底冷えが眠れぬ過去を呼びたがり
木の葉さえ人の心にふれて散る

岡山県 嘉数千代香

窓の灯へせめて折鶴折りつづけ（孫大学入試・二句）
折り鶴の羽ばたき四月の空へ賭け
人間に還る切符を買ってやり
貧しさの底の人間味に打たれ
この踏絵踏まねば明日へ生きられず

倉敷市 田垣方大

家族みな揃うて母のはずむ声
庭石に叱られそうなあわてよう
セールスマンおろし大根のような靴
春の風クレーンいやいやして動き
コンピューターたまには嘘も出してこい

八尾市 高橋夕花

ひと一人庇えばぬれる女傘
つつ走る心に遮断機おりてくる
にごり水 生きねばならぬ糧と知る
オアシスが欲しい二月の真ん中に
つまずいた足もと可愛い芽が笑う

藤井寺市 児島与呂志

老妻の若さが俺を追いたてる
孫の手を放して妻にある余裕

達者だけ取柄の妻に励まされ
春らしい風に水仙咲き急ぎ
嫁きおくれかも知れないきれいな目

尼崎市

黒川紫香

客が来て商売顔にまた戻り
山越えて見た次の山まだ高く
梅林に賑やかすぎる屋台店
野仏の雪を払えばお顔よし
ともしびがチラチラ冬の道遠く

高槻市

若柳潮花

持ち寄った噂を嘘でつき合わせ
掌へ丸め込んでる躰け糸
袖口で三味の棹拭く癖がつき
法善寺記憶のなかの灯を歩く
窓のない笑いは奥歯まで見せて

貝塚市

野坂つき子

水仙にとぼけられてた冬の窓
温室を出てから花の私語を聞く
その日からすこうし罪が軽くなる
どうしても憎めぬ的が一つある
やすらぎの笑顔へ何もかも許し

倉敷市

野田素身郎

黒髪のときをこの楢知っている
雪山賛歌した地で左遷の荷をほどく
僕故にふえた白髪と言いたそう

単身赴任半片を買い酒を買い
単身赴任また指先を針で刺し

倉敷市

稲田豊作

合掌す三百六十五善の成就
黄昏れて弥陀の明りが欲しくなり
そこばくの恩が枷になる世間
逆境に親は沈めど子は弾み
定退の身は捨て犬が愛しくて

鳥取県

鈴木村飄子

わかめ干す香りが村に春を呼ぶ
砂に字をそんなに書いてどうします
叱られたわけが猫にはわからない
積み木積み木いづれ崩れるものなるに
企らみもなく巨々と座りたし

豊中市

戸田古方

すねたのは一羽もいない千羽鶴(病床日記から)
いのちの点滴退屈しはじめ
合掌して喰べ残すくせつけはじめ
温泉を選んでみるもつれづれを
病人の見栄は寝ておりたくはなし

島根県

藤井明朗

シグナルも時には黄となる夫婦
腕組みを解いても話まとまらず
あきらめてから一点がよく見える
孫の成長へ叱る言葉を探す

迷うくせが出来て妻も老い

八尾市 高杉 鬼遊

いけずしても美人はやはり美しい
老人に椅子うばわれて落ちつけず

何度でも死ねるとかげと悪人と

後もどりできぬいのちと流される

鬼にならいつでもなれる鬼ごっこ

富田林市 和田 維久子

美容院の匂いそのまま母帰る

末っ子の嫁が家風をあらためる

尼僧まだ解脱にとおき鉦を打つ

ひとり生きて情性に暮れる日を悔いる

余生なお捨てず手腕家旗を振る

八尾市 宮西 弥生

裁かれる日の道ありて迷わない
用心深い男に吊り橋揺れている

それからは祈り忘れた人形です

逆風へ積木の意地はくずれない

貸し借りがなかったばかりに来た別れ

島根県 錦織 文子

上役へ今日も男の自我を捨て
女らしく朝の鏡に教えられ

百寿媼空気のような貌がある

よきことの途だえた日記乾ききり

あら玉の春の鏡へ先ず女

神戸市 小浜 牧人

人を疑うことの哀しき踏絵かな
若者の意見が少し胃にもたれ

Uターン故郷の土は温い

定年退職マリオネットに暮が下り

受験期の子を持つ愚かな親となる

富田林市 板尾 岳人

父の夢ばかり見ている冬景色

火葬場の鍵をわすれた母の道

雪景色遺言状を濡らさない

雪解けの水でうすめた父の筆

彼岸花父の便りが山越えて

大阪市 大坂 形水

事故起きる何かの教えかも知れぬ

巻き添えがなくてよかった事故現場

秒争う手術へ白衣慌てない

暇な眼に他人のあらが見えすぎる

何の道も同じさ気違ひになんははれ

大阪市 不二田 一三夫

男の美学 最後の弾は詰めてある

食うためにポルノ書いてるとも云えず

誤植したページへ年が憎くなる

せめて怖い夢でも見たし怠惰の夜

むらさきを好む女をまだおもい

竹原市 時広 一路

窓の面布雲の構図へ色を付け
石に彫りつけた愛にも風と雨
書き損じ出来ない筆が重くなり
保護色に染って自分の色が無い

守口市 野呂右近

死を語る時あの人に人間味
抜け道は通らぬ主義でよくつかれ
ダイヤルを半ば廻して気が変わり
吐く息の白さも乙女やわらかく

貝塚市 行天千代

深深と冷えて地球も凍りそう
古枯しの闇突き破る救急車
着る事も無い亡夫の服手入れする
友入院今度は見舞う番になり

東広島市 高橋 鬼 焼

新しい仮面も春の風を待つ
春をまつブーツが雪にぬれて行く
泣いた日も雪がこごって無人駅
人間の弱さを語る聴診器

松江市 小林 孤呂二

計算に弱い男はひとりほち
エプロンで襷はとつくに忘れられ
活けかえる花の命をよく覚え
降りつづき地酒の味の膚で居

今治市 長野 文 庫

面接へ猫をかぶってまかり出る
軸ものの包み警備の目を刺戟
格下げて下請会社にもぐりこみ
診断書添えて遊びのため休む

島根県 榊 みどり

門札を下せば大きな穴があき
夫の座をあけて悲しいとその味
法要も終り世間が近くなる
気まぐれの針へ通らぬ今日の糸

米子市 小西 雄 々

管理者の笑顔能面つけたよう
仕手株の値動き血圧にも障り
死にぎわが良いと頓死をうらやまれ
求愛の言葉を知らず聞きながし

松江市 中川 晃 男

はからずもなどと予定の賞を受け
酔うたときだけ親友になる握手
吊橋を風が渡った小さい揺れ
雪ずりの音一つずつ春を呼ぶ

島根県 堀江 芳 子

初孫に難さま早い春を買う
せかされた返事へごはん丸く飲み
心配をしてたと温い掌をもらい
夫になら言える理屈も子に押え

島根県 堀江 正 朗

手さぐりで見つけてほっと妻の留守
音だけの暮らしに欲をまだ捨てず
孫が寝てひそひそお茶の面白し
降れ積れ今日から温い春の雪

藤井寺市

西

いわを

変り身の早さに女うたぐられ
空想の美しさ知る民話生む
春告鳥 恋のさえずり待遠く
鶯は地鳴きを続け雪とける

今治市

月原宵明

観世音落葉の中に掌をあわせ
工場スト社旗に代って赤い旗
どうしたら動かずに済む電気器具
女の勲章エプロンへ吊ってやる

新宮市

大矢十郎

つつましく生きて旗日は旗を建て
バレンタイン妙な口上で娘は貢ぎ
焼香へ馬鹿ていねいに遅刻して
元旦の何はなくともひまが

生駒市

草深酔升

福もろて戎神社を回わらされ
叱られ賃貰っていると言うがまん
雪国もあまりの雪にうろたえる
此の上の御利益願う奉納金

大阪市

山川阿茶

水仙の青磁の瓶に楚々と立ち
逆風にも匂う心であつてほし
鶯は梅も見られず籠で啼き
朝をぬき昼ぬき学生アルバイト

松江市

柳楽鶴丸

失恋も失業もして親になり
不器用な妻 器用に子を叱り
飯の為の大学ならよしたまえ
好きな事が出来るなら地獄へでもゆきましよう

大阪市

柳原静香

孫と寝て妻なりの春餅する
孫が来て休戦ラッパ吹く夫婦
恋猫の行くあてがありふり向かず
神仏を素通り出来ぬ悩みごと

寝屋川市

宮尾あいき

壺の菊松といつまで添えるやら
年輪のたまもの白髪は染めるまじ
月冴えてたくらみ事を忘れさせ
寒の駅孫に送られ帰路ぬくし

今治市

越智一水

貧乏を楽しく喋る父となり
大ジョッキ女があげる平和かな
粧いをわすれ貧しさには負けず
ウインドに妻と立つのも春の宵

竹原市

小島蘭幸

飛んでいる時 迷いなどない鳥
体験談その口下手がいいのなり

坂のまん中でへんてこりんな夢を見た
再会の女性 セールスをしているの

大阪市 黒田 真 砂

振り向かぬ女に欲しい隠れ蓑
部屋広く広くひとりの夜を更かす

劣りの歩幅銀婚つつがなく
庭の木々すこやか倅だなど思い

京都市 松 川 杜 的

音、色となつてドーム威圧する (レザリアムを見て・一句)
片眼ダルマ惨敗の過去は語らない

道標の苔のみどりにある歴史
木洩陽の一とこ早春の鼓動する

桜井市 岩 本 雀 踊 子

禁酒のわけは笑いで消している
何くわぬ顔で腹を立てている

白足袋は五枚コハゼの外出着
あきらめる事を知っていた女

京都市 都 倉 求 芽

自分だけ判らぬ顔もしておれず
明日の夢買う金だけを握りしめ

この人は当座だけ間に合う紙バッグ
炬燵から出ても背中丸い母

松原市 谷 垣 史 好

右顧左眊磁石は北を指している

防弾ガラスの中で説いている民主主義

しんしんと雪は重さがない如く

春四月チビた鉛筆捨てましょう

八尾市 香 川 醉 々

古都残照岩の縞目は史の重み
校倉にえがく歳時記古都慕情

実像と虚像歴史の謎を詠む
オルゴール春の心で弾んでる

大阪市 川 口 弘 生

もう抜けぬ白髪へ染める手考える
くじ運が弱くて残り福ねらう

鬼の絵に先生の顔借用し
ソロバンのある好意だがうけておく

倉吉市 奥 谷 弘 朗

当選をすればやっぱりそり返える
小役人とどめに句碑を建て残し

定年の無欲の顔が淋しすぎ
L寸の婦人同士でウマが合い

大阪市 中 川 滋 雀

灯を消せば明日の手順が追うてくる
雪どけをひたすら故郷の墓へ待つ

サボテンと待つ日溜りの独り言
ハイハイと二つ返事は背なになね

平田市 久 家 代 仕 男

屋台蕎麦のれんの雪へ湯気を吹き
待てど来ぬ客に焦らぬ座りだこ
木訥の辨へ贅意の手があがり
歩くこと教えてくれた深い雪

柏原市

大崎可動

こころ開く人間ばかりなら許す
凡人の月末木枯らしの如く
支え合う世の暖流を描こうか
遠回りして何かを悟らねばならず

大阪市

江城修史

家柄が逃げても逃げても追うて来る
生きて行く為の媚とは悲しすぎ
古き良き想い出もなく老の坂
限界と思うある日の足の萎え

高根県

小砂白汀

マグネット人生塊などには目もくれず
阿呆面ぞろぞろゴルフを追うて昏れ
不発弾風化するまで抱くつもり
マネキンの微笑はマネキンだけのもの

枚方市

宮川珠笑

発車ベルエスカレーターあわてない
張り替えた障子の白が陽を含む
もめている境界消して雪積る
値段表見ながら寿司をにぎらせる

今治市

原田一風

黙って買うて黙って居れぬ妻が居る
掃除機の音に急かれて歩かされ
仁術は此処で死なさぬ紹介状
風花が路地を劇画の場面にし

大阪市

天正千梢

銭金で買えない物を金で買
からくりの人生何回もなる迷子
価値判断勝手な物尺できめてくれ
生活のおしゃれ礼儀にある自信

大阪市

西出一栄

舗装路の枯葉流浪の旅つづく
四季それぞれの風を柳は描いて見せ
春を待つ老夫婦只今冬眠中
エプロンを忘れて嫁に飼育され

守口市

羽原静歩

いのち いのち そんなに安いもんかいな
地球儀の裏と表にシンフォニー
バンビ バンビ バンビの絵本に春が舞う
人間万歳雑音なんかに負けはせぬ

西宮市

藤村べ女

ずり落ちる雪を聞いている郷の朝
五線紙へ孫の夢のありったけ
顔色に出さぬ苦勞を母が持つ
一息に飲む故郷の水甘し

出雲市

原独仙

絶好のチャンス勿体なく素振り
海無情捨てた想い出打ち返えす
酔興の句を覚めて見る将のなさ
その腕を活かさずスクラムばかり組む

西宮市 島居百酒

青年の主張感心してテレビ
さい果ての寒さ炬燵の中で見
養殖の海で同族しか知らず
里のない妻で忍従しかしらず

東大阪市 落合思月

長生をしてネと心にないお世辞
ポックリと逝きたし孫の嫁見たし
正直につけた家計簿寒くなり
借りものの年でこの世にまだ未練

倉敷市 藤井春日

新築と云うには早い陸間風
マイペースこれでいいのかなと思
カラフルな折鶴吊って胸を病み
乱れ髪今朝のお前は金に飢え

大和郡山市 森田カズエ

職安へ行く日の母の薄化粧
覚悟してきけと前置きながったらし
疑の目で親切を断わられ
娘への土産は孫の躰けかた

大阪市 室谷徹舟

一人寝の温もりし頃電話ベル
健康に気づかぬ人の大笑い
教育ママになりたくないといっている
学帽を耳で支えて親と来る

岡山市 直原七面山

浮気封じの釘をさす妻
恋の終りを告げる秋風
見え透いた世辞へ一喝
人伝てに聞く嫁の愚痴

松江市 岡崎祥月

金星のまま過ぎてゆく去年今年
一本の道あり恍惚まぬがれる
再職を退き恵まれた老店主

島根県 榑原秀子

関節の痛みが冬を長くする
虚勢はることもないのに立てる意地
沈黙が続くみかんをむきながら

大阪市 島田雄峯

大きな家に孤独が住んでいる
シスターの手の温もりを握りしめ
峠越すヘッドライトに人恋し

笠岡市 松本忠三

日溜りへ年金組が寄ってくる
じゃんけんで決まり後味の悪さ
何か用なんて娘が立ったまま

大阪市 本間 満津子

ふざけてるふりして袴の子に抱かれ
こんな姑をたよりと嫁が云うてくれ
箸つけず話して話して満腹し

諫早市 原田 明春

財布はたいて悪友同士の終列車
光陰矢の如し役職はほど遠し
もったいないと食べる女房の肥りよう

八尾市 内海 幸生

出会いから終章の譜は奏でられ
追加もうさせぬ幹事も飲めるくち
鶴折ったことさえ時間に流される

鳥取市 両川 洋々

悪銭を握る悪魔にささやかれ
うんざりしてる雪に珍客まだはしゃぎ
二〇〇カイリ越えてカモメの恋つづく

大阪市 河井 庸佑

山小屋で春雷ひとり聞いている
栄転へ蔭の音がうるさすぎ
社長前に ものおじもせぬ新入社

玉野市 小谷 仙山

都合よく忘れられる年に成り
又来いと其の場かぎりの御挨拶
還暦のただ有難いお目出度い

東大阪市 竹中 綾女

句会の帰路満月の美を夫と愛め
時間気にしだすと五分の長いこと
訪問へ寝た切り老人よくしゃべり

神戸市 中村 ゆきを

良い話大きな耳の人と逢う
床屋出てこのまま歩こう春の風
ほんとうの笑いはずぐにひっこめる

鳥根県 大森 孝華

さざ波へある日誤算の石つぶて
旗色へ迷う打算にある表裏
ひと筋のけむりが過疎へとりこにし

兵庫県 遠山 可住

社長社長と妓に辞令もろて飲み
寮の窓思い思いの雨を見る
ことわりがはつきり言える女です

東大阪市 齋藤 三十四

裏話し今も思い出笑いをす
七光りとは知らず自力と自惚れる
蛙の子と知っても親心

鳥根県 太田 亀甲

停電にローソクここにあつた筈
手水鉢柄杓もとれぬ大寒波
五ツ子は日本中が可愛がり

鳥取市 小林 由多香

目ざわりになるやつがいて席を変え

どん底にいてユーモアの使いわけ
遠来の客を迎える海が吠え

鳥取県 林 露 杖

公示前勝負あったの声もきき
母たりし女でありし針供養
よもぎ餅墓参のあとの語り合い

姫路市 梅谿庵 不 酔

裏門へ補欠ならと温情味
僕だけで拝みたい気の初日の出
わしの出る番かと音痴汗をかき

大阪市 西 川 誓 二

人間のエゴや生簀の魚放ち
裸のマネキンに心くすぐられ
共白髪へ捲まず回る夫婦独楽

羽曳野市 塩 満 敏

雪だるまお隣りさんの雪もある
雪山から飯れば大阪も大雪
同郷とわかる言葉に寄っていく

竹原市 三 宅 不 朽

人の掌に小海老ながらも髭を刎ね
十二才の腕力ぼつぼつ当てにされ
子を嫁かせ夫婦にあまる午後の雲

松原市 玉 置 重 人

世話役の本意ではない低姿勢
老夫婦過去のピントは合っている

鴨の群余呉湖を寒く寒くする

大阪市 藤 田 頂 留 子

売り急ぐ声へのんびり品さだめ
限界ではないかと自句に問いかける
串かつの客と郷土史を語ろう

和歌山市 垂 井 千 寿 子

精一杯生きて負け犬などでない
だんだんに剪定されて女の座
改築の二階は亡夫の臭消し

松山市 谷 の ぶ お

身から出た錆と半分ほど悟り
サイクリングと思えば集金また楽し
半跏思惟日向の中にミイラめき

呉市 林 野 甍 光

給料日へ妻強力な磁気を持ち
吊皮へ倅せ一つ握りしめ
気分屋のもみ手に軽く絡りまれる

鳥取県 川 崎 秋 女

厳しさとやさしさ秘めて雪つもる
雪が降る女の汚点消すが如
春を呼ぶ雪と信じて耐える朝

堺市 伏 見 茂 美

戯れにカズラかぶって泣き笑い
底冷えに老犬毛布支給され
カギ開ける主人に番犬身がまえる

冬眠の間に世間ちと変り

野良犬の頭をなせてやる孤独
一合の酒で男があしらわれ

兵庫庫 大江 秋月

西宮市 若林 草右

近道を知らぬ人生ちびた靴
するめのように改札冬の手を焙り
酸素吸入で生かされている熱帯魚

大阪市 横地 雅風

日曜をせめて朝寝の妻へ和し
刺繡する片手が打つ真似二人旅
暖房に馴れゴキブリの季節感

京都市 山本 規不風

五十回忌父知る人も無き法事
知らぬ間に重なっている手に負ける
我を捨てええ舞妓はんになる涙

和歌山市 若宮 武雄

これしきの事で嬉しくなる弱り
有終の美 祈るつもりのない芒
ふる里を問えば泣くだけ 渡鳥

大阪市 神夏磯 道子

妻の座へ飾られてからの不倅せ
人情へ法を曲げたいこともあり
倅せな指へ宝石よくなじみ

松江市 恒松 町紅

孫自慢聞き手の方も孫があり
女房が居ぬとわからぬ集金日
呉越同舟割かんだけは貰つとこ

東大阪市 市場 没食子

主治医には内証で五勺ばかり飲み
学級閉鎖風邪でも塾へだけは行き
もうぼちぼち猫なら化ける年齢になり

岸和田市 植山 武助

続編がない人生と云うドラマ
転宅の整理へ出て来たネジ廻し
肩書の重さ感じぬ御厚情

大阪市 西森 花村

俄雨傘屋をよけて雨宿り
明るさも雪明り程株屋街
唇は此処よと赤く赤くぬり

岡山県 竹内 翁童

家計簿に叱られ一円のつもりもらう
たて前で拍手本音でもえている
歳の功そんな感じで丸められ

和泉市 西岡 洛醉

無理押ししの心淋しい人であり
ゆずり合うところ陽炎少さく燃え
精一っぱい生きる背中に夢を載せ

兵庫県 河原 みのる

今昔や吉良も田中もくにでもて

一兆減税聴きつつ三十銭の職
妻 娘 或るとき女としての敵

滋賀県 溝口 はやを

軒氷柱地獄の鬼の牙伸びる
筒抜けの小声は耳に匂うもの
見送ってもらいたくない悔の道

大阪市 那 須 鎮 彦

雪解けの音を聞いている石仏
あやとりのそこから悟るもつれ糸
気まぐれな女の指が十字切る

和歌山市 内 芝 としよ

腹いせに蹴られるカンの迷惑さ
逆風も素直に受けて春を待つ
停年の首輪はずれて妻と寄り

岡山市 出 原 敬 一

母の亡い子パンツのゴムは伸びたまま
こだまする派手なかけ湯は年増かも
失恋の顔して女子大落ちてくる

米子市 増 田 竹 馬

今年早い寒波のしらせ膝に来る
上役がソッと包んでくれたミス
儲け口無いかないかとふところ手

唐津市 新 岡 回 天 子

過疎の村隣が減って一軒家
目立たない馬の足にて年老いる

のし袋重たい分には飛びつかず

富田林市 岩 田 美 代

粉雪のぬくい想い出肩にのる
雑音に音痴でないのがひとり居る
冬灯幸い想う事という

大阪市 神 田 秀 峰

駅員もラッシュに吊られ声を張り
過疎に泣く人へ掛橋夢開き
お医者でも難病治癒に神仏

宝塚市 小 畠 無 聖

清冽な少女の喪服雪に立ち
なんと淋しい声のない落涙
ステッキも丸みがあつて身を支え

柳井市 弘 津 柳 慶

何処でどう狂って来たのか冬の蟻
スーパールのレジ能面のロボット
妻と二人福は内福は内で済ましとき

伊丹市 樫 谷 漫 柳

沸騰の湯気今を生きている
給食の鮭やわらかし退職日
縮かんだ手の賽銭が祈る今日

鳥取市 大 塚 豊 生

ユーモアに救われたあと座が弾み
豆撒きへ子の無い夫婦二人きり
老漁夫が一日海を見て飽かず

樫原市 岩井 本蔭樺

ああ明治 男耕女織の温い日々
ふくらみが哀し尼僧よ春の庭
ジーパンの夫婦に朝の歌がある

大阪市 津守 柳信

ほころびを縫える女の満ち足りて
何時迄も若い気でいるスキー帽
白雪に耐えて緑に映える松

倉敷市 能登原 白水

好奇心さめたら腹がへっていた
忍耐を美德のように老い給い
倅せを産み出す汗に陽も躍り

鳥取県 清水 一保

平等に積った雪で納得し
泣いて居る鳥かも知れず鳥の歌
あの頃の面影互いに探し合い

大阪市 有信 新之助

がに股のブーツに抱かれた赤電話
ちびりちびり余生が惜しい酒になり
桐箱入りを幾つか遺して明治逝く

氷見市 関 美子

夫の胸浜辺に砂があるように
愛犬につまずくこの頃せいてはる
若さが失われて行くよ砂時計

下関市 国弘 半休門

雑魚に餌をかすられている釣りが好き
新しい部品を入れて噛み合わず
金運へいやな虫だが蛇を抱く

大田市 藤田 軒太楼

打診して手応え待つのも年の功
逆境に耐えて人間の角もとれ
ヒナ飾る老人ホームを春包む

仙台市 川村 映輝

順番が来たら後輩に追い抜かれ
漬物のうまい東北雪の中
手に負えぬ子だった出世頭なり

和歌山市 沢山 福水

如月の風に山茶花散り急ぎ
一瞬に奈落へ落ちたオーバラン
ドーランを落せば母の顔となる

正本 水客

杉落葉 眼のとどく限りの石段
湯治客の布団を積んで酸ヶ湯 昼
爆裂火口 沼の青さを深くする
鶴ヶ城は半月 哀史ただよわせ
またこえのう庄内弁の宿を出る

川村 好郎

歯車の一つと思う朝を出る
和解するひよつとこ面が曲つてる
奢らす気で来たら本日定休日

目かくしが取れ過去をかくさない
白紙持つ女の意地をあわれとも

凝脂玲瓏として湯をはじく

世を叱る声も張りあり健者過ぎ

何事もなかつた廻転椅子とは見えす

余生まだ血の気の多いことを言う

冷めしを詰めても弁当箱である

握り返す手に六十の血がたぎり

梅見バス軒につかえる町を抜け

土鈴買う音あれこれや梅の宮

手づかみの民族料理にある和み

春や春蘭蝶語るのど仏

ガタがきて晴耕雨続も幻か

灰までという諺のうそつばち

老人の七癖正にあてはまり

解腕には遠くあせりへ合掌す

み仏は話しかけたい御姿

百歳の坂はポツキリ折れる坂

豪雪に不意を突かれた藪坊主

多党化に減税論議派手にされ

二ヵ月も異常寒波が腰を据え

菊 沢 小松園

西 尾 葉

若 本 多久志

伊 藤 茶 仏

居すわった寒波に計報続く数珠

書道展何かを褒めて帰って来

待つ如し亡友の写真が笑んで居る

遅仕舞を叱る気持が判るかい

信じてる鱈の頭は放さない

労り合つて互に自説を譲らない

立春の雪不況のかけをひろげつつ

立春にテレビが送る吹雪く音

海猫が来たとの便り春立つ日

吹きだまりにも四季あり陽は上に

点と線結んで夢の設計書

花の山近し一升瓶軽し

飲み疲れなどは言わず春を追い

花吹雪みんな美人に見えてくる

散り際の桜へ猪口を温めん

度を過す気が向いて来た花の酒

あす嫁く名残りを琴の爪にこめ

紅白の草履をしかとはく門出

笑うても泣いても年輪ふえ続け

浮世絵の姿態で足の爪を切り

ニコニコと内助を秘めた丸い膝

小 西 無 鬼

尼 緑之助

浜 田 久米雄

本 田 恵二期



麻生路郎物語

—資料雑記から—

(28)

東野 大八

前号をもって「麻生路郎物語」は、そのストーリーの幕を閉じた。暇さえあれば大きな机いっぱい資料をひろげて、同じようなことばかり書きつづけてきた私は、実のところホットした解放感を味った。出来のよくないそんな私の悪文についてきて下さった皆さん方も、やれやれどうやらこれでケリがついたか、と一息ついていられる顔も眼にうかぶ。毎号、貴重な本誌上を三頁も割いて貰って二十七回にわたって掲載して頂いたわけだが思えばそのストーリーはメンストリートだけで息をつく横丁がなかった。また思わず息をのむエキサイトした一幕や、一読ギョッとさせるような秘甲の秘話もなかった。いうなればヤマのないキレイごとを終った、という感触がしきりにするわけだが、内心はそれでよ

かったんだと、自分自身で納得させている。実伝作家の杉森久英あたりなら、素材を八方から拉してきたって、仮借なき完璧の伝記に仕上げたであろう。しかし、私の場合、そこまでは追い切れなかった。

人間路郎をなりふりかまわず裸にしてやろう、そうした気負いは、頭初なくもなかったが、やがてそうした非情さは、川柳界という特殊な環境や、路郎の血をひく川柳誌という立場などから、さまざまな判断や、制約が生じて、ついに裸身を求めたはずの相手は、いつのまにか下着をつけ、普段着をまとい、場合によってはネクタイまで結んでしまう破目になった。いわばこれも成行きである。

この退屈な長講一席を終った私の感慨は、一ジャーナリストの端くれとして、新聞でい

えば、これは普通の日刊紙でなくて、業界紙なみの形だったという結論をかみしめている。(ちと新聞人の玄人的感触だが……)

さて、つい余計な無駄口を書いてしまったが、これからこの号と次号につづく二回分のまとめは、歩いてきたストーリーからのこぼれ話の資料雑記である。本稿といわば前号からの延長なので、以下敬称を省かせて頂く。

大阪の高商予科(明治三十八年ごろ)にいたころ、路郎は尺八も熱心に習っていた。尺八の都山流の流祖中尾都山の死を悼む記事に路郎はこう書いている。

「実は私は都山師の古い弟子で、明治三十七、八年頃だったか、都山師が旧難波橋筋の

今橋を西に這入った南側で尺八指南をさされていたころに入門している。大げさにいえば、いささか前歯が飛び出し、右親指のかつこうが変型に変わったが吹きまわったものだ。

その頃は玄関が稽古所だった。まだ譜本が発行されていなかったので、習うだけずつ師が半紙に譜を書いて渡されたものだが、これが少しずつ溜っていくのが習う方にとっては魅力だった。その頃玄関番をしていた上田という少年が、後年上田流の流祖となった。私が高商予科にいたころのことで、柔道の寒稽古へ出かけた時でも、尺八を携帯することを忘れなかつた。出入橋の学校まで、六キロほどあったので、夜半の三時に家を出て、五時に学校へ着き、八時ごろまでドタンバタンをやり、その合い間には尺八の吹奏をやったものだ。それから井戸水をかぶり、おかげで腹をふくらませ、九時から授業をうけたのであった」(「川柳雑誌」No.425)

筆者はこの古い川柳のナンバーを眼にして、その昔、筆者とさしの路郎醉談で

「わしのアゴの大きいのは、尺八もやつたからだよ」

の一口があつたのを思い出した。

「先生の上あごの大きいことは、大阪警察病院の歯科の患者の三人のうちの一入である。そうな。あとの二人というのは講談師旭堂南陵師と、今は亡き名優実川延若丈とである。そうお聞きしたら「俣夫の足が発達したようなものさ」と否定されなかつた。柳界のための幾

十年の獅子吼がそうさせたのであらう」

(戸田吉方・昭和25年11月寿像贈呈式典にて)

獅子吼もさりながら、アゴの強さの初手はどうやら尺八に起因するようだ。

——南無日車さよならとも云わなんだ 路郎

昭和三十五年一月十日路郎は、かつての日の遠いむかしの盟友川上日車の終焉の地、近江八幡市を訪れている。随行したのは、岩崎愛二、正本水客、橋高薫風、不二田一三夫、久米奈良子、林宏子の六人。この訪問の模様は、「川柳雑誌」(No.393)に要領よく不二田一三夫がまとめている。

川上日車については、本稿にも詳報した通りだが、死去したのは一行が訪れた前年の十一月九日である。三十三年に中風を病み、実妹豊さんに見守られて、その不遇の生涯を閉じた。七十二歳。

日車の晩年は、こと夫人とも別居し郷土史の研究著述という日陰のあけくれであったという。「葉柳」のなかに十代末の若き日の日車の写真があるが、まるで絵にかいたような美少年ぶりに愕かされたことが、晩年の老爺と変じたその写真も、ありし日の匂うばかりの眉目清秀の面影をとどめていた。

「小島の家は北堀江にあって、心齋橋北詰西側に小島洋服店陳列所を出していた。厚司にそろばんという六厘坊君や日車君と私もそこ倉庫の中で句会を催したほどの熱心家でした。その後、六厘坊君が結核で魚崎へ転地療養に行ったときなど、さびしがるうと、

日車君は六厘坊君と起居をともにして友情の厚さを示したものでした」

「翁の奇行の一つとしてこんな話もある。編集会議を南地一流のお茶屋でやり、きれいでこの芸妓を南地には二十人も侍らし、そこで次号の企画をし、文学を語り、川柳発展に心をくたくたのだが、せっかくならば芸妓はほつたらかして、呼ばれた方の芸妓も芸妓で、仕事のじやまをしてはと、少し離れた後方で勝手なおしゃべりに余念がない。成駒屋がどうの、河内屋がどうの、鷹治郎や延若の話しておれば花がついてという風変わりな話であった。つまり一つの座敷で、編集会議をする数人の一団の後方で、二十人もきれいだころの一団が別々にいたわけである。この芸妓衆の一団を屏風と呼ばれていたそうである。脂粉ただよう女人群屏風の前で、柳談を咲かせての編集会議を

「よき時代のよき人ちちよ」

とは愛二氏への明治への郷愁であろうか」

(「川柳雑誌」No.393・日東翁終焉の地を訪ねて・不二田一三夫)

六厘坊と路郎は同じ歳で、日車がこの二人よりも一歳年長だった。明治も末の新しい川柳をささえたこの三羽鳥、しかし、三人のリーダー格は六厘坊で、句はもとよりその人格についても路郎は極めて大きく影響されていたこととは否定できない。

「井上朝花坊さんの記憶中の六厘坊をよみました。が、十四歳ぐらいの少年にしては、句が大変おとなびています。そのころの句風か

らすればたしかに尖端を行く天才児だったの
でしょう。劍花坊さんの六厘坊の記事の中に
新派歌人と謝野夫婦を大将とせる明星派が芝
居をするというをきいて六厘坊は

——鉄幹が眞晶子がおこななり 六厘坊

——新派の歌に倦み珍派の芝居なり

——馬の足になるは地方の誌友なり

——はるかに引幕を贈る六号活字連

——文士劇讀文明誌で幕を開け

とからかったそうです。(飯乃書體)

堀口堯人が「川柳雜誌・古稀特集」(昭和32年

・No.362)で「わるき帖から」と題し、大正

初期の路郎作品を十句とりあげて。若き

日の路郎作品の素地を物語るものとして興味

深いので、この名文を失礼ながら要約して採

録させて貰うことにする。

堯人のいう「わるき帖」とは「その人すら

忘れていたような古い作品を、ひそかにひか

えておいて、あなたにはこんな句があります

よとびつけてりさせて喜ぶくせがある。わるき

帖と名付けている」(以下略)という次第。

——気短かに嫉(しつけ)を取って若旦那

大正二年の路郎先生の作。今の人々に、し

つけ、の意味がわかるであろうか。

——立話宿替をした事も言ひ

先生の作としてはあまりにも平淡なようで

あるが、立話の外がわやかたちを写したので

なく、話の中味をあらわして明暗をつけた、

きめのこまかいところがわかりますかお立

合。

——千日を後戻りする懷手

いまの歌舞伎座のところに楽天地と称する

明治趣味豊かなる建物があった。(中略)これ

はその頃、浅井五葉先生激賞の作品である

が、絵看板をちらとながめて後戻りする若き

日の作者はいささか酔うているのかもしれない。

——思い切らせた筈が心中

十四字調の鋭さに鬼才路郎のある一面が

出ている。だれがどうして、どのように納得

さしたのかしらないが、世間体や義理の重圧

に対する抵抗が、たったこれだけの中に現わ

れている。近頃こんな句風は少い。大正三年

の作。

——鉛売は何処の子供か抱き起し

その頃まだ紙芝居はなかった。鉛細工はあ

った。(中略)市井の風物と人情のある句、お

人好し路郎がよく出ている。

——私生児は母の纏織と父の才

私生児の性格をチラとみせて、その父母の

ロマンスにまでさかのぼった十七字の力はお

どろくべきものである。四十五年後の今日と

いえども通用する作品である。

——一番の渡しを渡る豆絞

山崎と水無瀬宮の中間の淀川堤から出る渡

し船は今でもやっている。中州で一っぺん乗

りかえて、再び舟にのらねばならぬ。この中

州は谷崎潤一郎の小説「芦刈」によつて有名

であるが、サイクリング流行の今日たづねる

人もあるまい。むかいは橋本である。飯の小

橋を渡れば遊女町のまん中に出る。以前はこ

の渡し船でわたって一夜の夢を結んだ若い衆
がふたたび船の中の人となり、土堤の遊女と
きぬぎぬの別れをおしむありさまは珍らしく
もなかった。

その時の頬かむりの豆絞を詠んだのかどう

か知らない。大阪松島遊廓も川に面した家が

あったから、そこらあたりの早朝の風景であ

ったかもしれない。どちらにしても路郎先生

が若かったことだけはたしかである。

——履歴書に楷書で書くも久し振り

大正四年の作。(紙数がない、あと略)

——粉煙草にいい知恵の出る害もなし

粉煙草とはきざみのこと。(中略)刻み煙草

も残り少くなれば、火付も悪いしキセルもつ

まる。何だかわびしい気持がする。

——抱車夫さきの女房が逢いにくる

今の自家用自動車運転手、昔は人力車が多

かった。その車夫に極道者が少くない。捨て

たのか別れたのか、それはわからないがあい

にきたのは未練か、金か。複雑な人生内容は

泉鏡花にでも書いてもらったらはつきりする

かもしれない。

これらはいずれも大正初期の作品であるが

どうしても明治の匂いがする。しかも、それ

ぞれの作品にじっくりした情緒が感じられる

のは、単に私のよき時代への郷愁であろう

か、それとも路郎先生の人情味がこもって

いるからであろうか。

——前号訂正 P 22 中段 8 行目「オ、山雨楼と

呼べば一ト筋のけむり」



清 博 美

俳風柳多留廿五篇研究

— (十四丁) —

鈴木	黄・清	博美・青木迷朗
室山三柳	・八木	敬一・西原亮
入江	勇・紀内	恒久・岡田甫

24 大だわけ茶みせて腹をわるくする

鈴木—酒を飲み過ぎて下痢を起す事は昔も今も同じであろうが、お茶を飲みすぎて腹を悪くするとは、とんでもない大戯け者の阿呆だということ、ではこの阿呆者は誰かといえは、浅黄裏の田舎ざむらいだろう。

「茶店」といえば、当然看板娘が居り、時には夜には娼婦に早変わりする様な所、浅草伝法院筋向うの二十軒茶屋だの、上野山下辺りの見世物小屋と共にある茶見世と考えてよからう。

茶をきつし尻をつねる代百銅 二五・10
茶を五六十はいのんで手をにぎり 拾・二
室山—同。『川柳吉原志』では、二十軒のところへ本句を入れている。

二十軒さいげんもなく茶をくらひ

岡田—同。

245 女房の留守に出ている火打箱

鈴木—「火打箱」は火打道具を入れておく箱。はつきりしない句だが、駄労解としては、狭い家といえ火打箱の置場所は女房しか知らない。そこで、女房が留守をする時、亭主が帰っても直ぐに火おこしや煮たきが出るようにと、狭い玄関先きにデンと火打箱を出しておく。

室山—火鉢の火をかまわないため、煙草の火種がなくなり、火を起すのが面倒な亭主、火打で吸いつけてそのあとを放置。いつもは行灯の下あたりにしまわれてあるはずの火打箱が、部屋の真中や縁側などへ出ているという

拾二・29

のではなからうか。来客があったら玄関に（というより上り框に）……である。

入江—「女房が留守で一日さがしごと」（傍五・3）といったことがないように、亭主に困らせぬ配慮をする心がけのよい女房を詠んだものと思う。礎稿に賛。

紀内—礎説、室山氏説共に考えられるところ。とにかく、女房がいないと亭主は家で無力であることを詠んだもの。

青木—同。普段火打箱の在り場所など気にしていない亭主へ対しての、留守にした時の女房の配慮。

西原—室山説賛。女房留守の不自由さ、あわれさを火打箱で象徴したのであろう。

岡田—室山氏の使用したあとの放置説と想っていました。しかし礎解も一説。

246 目を口にして呼出すの面白さ

鈴木「目は口程に物を言う」と俗言があるが、これは主として恋愛の場合であつて、この句は恐らく男同志が誘ひ合つて悪遊びをしよとする情景と思う。

いわずかたらず我心目で知らせ

六七・四

気があれば目も口ほどに物を言ひ

拾二・三六

先づ目と目それから手と手口と口

拾二・一四

室山一贊。男女、男々、どちらともとれるが悪友の遊所への誘いの方がおもしろうである。

入江一同。

大ぶりの咳には女房油断せず

傍二・七

御内儀がにらめつけたと連ははいひ

五・三一

岡田一同。

247 芳ごのとうにたつたを後家八買

鈴木「よしご（葦子・霞子）」は葦の若芽のこと。「芳」と書いてあるから、この場合は芳町と考へる。従つて芳町の飛子のうち陰間として売れなくなった年令をとつた者を、男娼として後家が買ひに来る。芳ごは擬人名か。または芳ごを芳町の飛子と解すべきか。「とうにたつた」を生かすために、芳ごを葦子にかけた言遊びか。

芳兵衛といふふなのを後家八買 傍一・二九
よしは化ケそうなのを後家へ出し

室山一贊。葦の若芽の藪(とう)の立つた(盛りのすぎた)のを……、と植物の縁語仕立の句である。

入江一同。室山氏の説明通り。

大釜はうしろの家へよく売れる 傍一・四九

岡田「芳ご」は芳町の暗示と、「とうの立つ」の縁語のための使用。

248 村の色おじやるべふかと蓮さん

鈴木「あまりはつきりしない句だが、駄旁解をいえば、六十を過ぎた好色ちいさんが、遊里で「田舎出で余りこの道になれていない若い娘が別たら買いたいのだが」と。

何か別の解釈もあるように思われる。先輩諸氏のお教示を願いたい。

室山「老人でなく、若い者同志の麦畑あたりで、蓮持参のいわゆる村出合であろう。

「おじやるべふか」は、歌舞伎などの用語を田舎ことば化した語で、「蓮さん」には村芝居を利かせているのだから。あるいは、村芝居の旅役者への誘いの言かも知れない。

紀内「諸説に不賛。「覺算」の洒落である。覺算は御承知の通り、かんざし等を投げ落ちたところから覺のへりまで目の数を算え、丁なら待人来る、半ならば来ずという占である。また、「おじやる」は「お出ある」の転で「来る」の意。

したがって句意は、恋しい人が来るかどうかの占いを、田舎故に「覺算」ならぬ「蓮算」でやるということである。

西原一同。むしろ算で村の色が生きる。

岡田「紀内氏の説の通り。

249 闇ハあやなし持参娠孕也

鈴木「闇ハあやなし」は、凡河内躬恒の梅の歌、「春の夜の闇はあやなし梅の花、色こそ見えね香やはかくるし」からの文句取り。人三化七の持参金付き嫁では、顔の見えない夜の夜中に夫婦のいとなみをする。そんなことでも人並に嫁は妊娠する。

入江一贊。

金づくでやつと娘をしてもらひ 末二・二九

八木「文無（あやなし）」は区別がつかないの意。暗くて（顔の）区別がつかないというのも、時に便利なものである。

岡田一同。

「川柳年鑑」

一九七八年版発売中
千八百円・送料160円

内容一座談会・川柳の位相一作品集一古川柳研究活動一全国柳社一覽ほか一
一九七八年版川柳年鑑作品集（一人3句・一年以内の作品）希望の選者一柳漣子・黒朗・閑人・紅寿・九馬諸氏一
52年8月末日締切
102千代田区富士見二の六九九雄山閣編集部

同人吟

秀句鑑賞

前月号から

正本水客

今回は出来るだけ平易な言葉で、平明な表現をしている句を取り上げてみたと言うよりチェックした句が自然にそうなったと言うほうが正直であろう。従って鑑賞の語句も説明的な冗漫さを避けた。

運悪い女を見る冬の月

野坂つき子

冬空の中につただけ光っているお月さま、私にはそれが冷たいものには思えない。

百円ライター社長が持てばキザに見え

不二田一三夫

ひと頃、外国製のライターが流行のように持映されたことがあるが、百円ライターは軽く結構使いやすいと言う。それがキザに見えなくなったとき社長業も板についてきたと言えるのかも。

紙吹雪 秘密のメモの捨てどころ

高橋千万子

何かミステリーの結末を見ているようで紙

吹雪が面白い。

賀状もどる とても哀しい顔をして

高橋 夕花

郵便番号も宛名もチャンと書いたのに。こんなとき賀状に書いた自分の文字が何故かみじめに見える。

雪沓に残る女の暖かみ

香川 酔々

雪沓だからいい、雪沓だからいい。山の宿 心得頭に雪が降る

宮尾あいき

山菜もお粗末、サービスなども行届いているとは言えない、そんなとき気分を変えるように降り出した風花の美しさ、心得頭がいい鐘の音の消えるところは暮れている

村上 春巳

杉の木立の果てか山の端の辺りか、消えるところは暮れているの捕え方は心憎い。絵には描けない絵。

岩本雀踊子

遠くはなれている母と子に通じるもの、新しい発見が常にいいとは言えない見本。薬屋根に芽生えた草に花が咲く

竹中 肖二

水芭蕉で知られる尾瀬から会津へ抜ける途中に檢枝殿(ヒノエマタ)の部落がある、多くの家はカヤ屋根が残っていて、その上に赤いオニユリが咲き乱れるさまは素晴らしい情緒があった。

平穏な初春は夫の謡から

堀江 芳子

平穏こそ最大の幸せである、夫の謡は下手なほどいい。

また春か このごろ四季の近い距離

錦織 文子

おめでとう、正月の挨拶をした後で、もうすぐお正月ですねというギャグがある。野菜ひとつ採ってみても全く四季感がなくなってきた。春が夏が気忙しく押しかける。負け試合に出る子をなんと励まそう

野田素身郎

笑顔で手を振ろう、怪我をしないでネ。男性歌手可愛いともてている

塩満 敏

若い女の子に好きな男性のタイプはと聞くと、百パーセント優しい人という答が返ってくる。ああ平和。

地藏さんのまわりは丸し冬の風

若宮 武雄

すぐれた童画の世界に誘ってくれて、お地藏さんの顔もまらるい。

御無沙汰をしましたで済む娘が帰省

清水 一保

喧嘩をしても後に残らない、便りが無いのは無事である証拠と親のほうは諦める。

父ひとり鬼も一匹 山の道

板尾 岳人

いち対いちで鬼と対峙している父、子供に与える夢は強く大きな存在である父親。この句だけが平明なという主題からいささか食み出しているとも言える。

水煙抄

秀句鑑賞

前月号から

小野 克枝

一隅の晴れ間へ希望つなぎとめ

江口 度

雨にも負けず風にも負けず、平凡な暮しの中に射し込む「希望」と云う光りに向けて手を振っている人間の姿が浮び上ってくる。ピンと心に響くさわやかさがある。

カラフルな葉をのんで生きている

堀口 欣一

一寸の風邪で医者へかかっても受け取る薬の量の多いのには驚かされる「薬は原則的には毒がある」と云うのが専門家の常識であるのに人間の弱さが薬の崇拜者を作り上げているのであろうか。「カラフルな葉」と云う表

傍観者になり切っている置時計

西山 幸

ただ黙々と時を刻みつづける置時計、この傍観者はあくまでも他人に迷惑をかけずに自己の責務を全うしているのであろう。感銘の句。

誠実も売るので足にマメが出来

柴田恵美子

使い捨て時代などと大見得を切って消費者の購買意欲をかり立てていた時代は過ぎ去った。吾々小商人はオロオロしているばかりでは口が乾上ってしまう。「誠実」を詰めた靴をしっかりと小脇に抱えて足のマメの痛さも忘れ東奔西走しなければならぬのだ、教えられた句。

あげがたの街灯の火は昨日の火

桑原 道夫

昨日に続く今日であるのと同時に昨日はも早過去のものであり、明け方の街灯は消滅する運命にある。明日を見極める強靱な心を育てると示唆している。奥行き深い句。

五十路の春着焦りの彩を選る

杉浦婦美子

今年あたりから又「ミニ復活」の気配があると云う、景気回復の兆だと思いたい。女五十才。(私ももうすぐ...) 本人にしてみれば

ば若い気充分なのであるが、周囲の目と己の危惧感がこれを阻止する。この気持幾度となく経験すみの私。苦笑しながら頷かせてもらった。

女四十もうあわてないあわてない

一三夫

以上ほかに印象に残った句
ふり捨てることのみ多く女坂

宮尾みのり

だまされる判とは知らぬ息をかけ

本庄 快哉

落葉樹私は誰の為に枯れ

松本 文子

喧嘩など見せぬ夫婦で勝気なり

小谷 清女



PT-55

高級洋菓子・レストラン

本店 洋菓子部 TEL (21)2334
レストラン TEL (33)9974



菊沢小松園選

豊中市 安藤 寿美子

旧姓に戻った姉のアイシヤドウ
引分けにしよう碁盤の昼終る
添え書きに新築したと年賀状
内職に生活を守る旗がなし

尼崎市 中谷 利美

人恋しそんな私を人が避け
全力で走れば雑音きこえない
お百度を途中で止めた御回復
後家相の女てきばき冬を越す
思い出すのは恥かいた事ばかり

今治市 園部 正則

歩道橋口に出さねどよっころしよ
気休めは言うまい一寸先は闇
将来の為の苦言と子は知らず
食い逃げをさせてたまるか試食品

八尾市 納 史葉

丸い石やっぱり年を経たのだけ
本心を見せぬ角行不気味なり
鉄壁の塀は庶民へ距離をおく
一日の汚れからみ合う洗濯機
葉書の怖さ爪にも模様入り

柏原市 小谷 葉子

最後の力振りしぼって髭のびる(夫逝く)
これ以上裏切りはせぬデスマスク
漂流のいつまで続く難破船
ブランドグラスに私の夜がある

寝屋川市 江口 度

はずみすぎて少女の匂いのする手毬

帽子を被って自画像ばかりとく
一人ずつ違う宝を隠し持つ

昨日今日昨日の匂いの中にいる

唐津市 松垣 岩光

逆境へ岸がだんだん遠くなる
灰で咲く花は真心知っている
信仰のかけらをメスが聞いている

春の草思ひ出にあるわらべ唄
そのむかし皆食べていた春の草
考えて置きますといいそれつきり

大阪市 堀口 欣一

足袋きりり年輪にじむ美しさ
咲いて散るただそれだけの世に疲れ
輪廻かなおなじドラマを描く母娘

東大阪市 崎山 美子

夢はいい僕を主役にしてくれる
宴会にでしゃばりが居て盛り上がる
風に聞く噂は風の中に棄て

大阪市 文川 野生

風の糸もつ手に昔よみがえる
ライバルの若さを意識しためがね
逃げて行く若さへせめて赤い服

熊本市 有働 芳仙

父不在夫不在にやつと馴れ
ハウアーユーもう春ですよとクロッカス
出張に日本の匂い置いて去り (同僚の日本帰国)

ロンドン 佐々木 朝代

よく燃えたなあと野次馬寝に帰る
恋人はだませず親をだまして来
年頃は親の知らない小抽出し

今治市 今井 松花

悪妻を今さら託びる年でなし
慣れぬ嘘ついて女は瘦せていく
万策がつきて仰げば空がある

鳥根県 松本文子

手に職があつて再婚踏み切れず
健康で旨いお粥がたけぬ妻
玄関の寒さ仲々出て呉れず

鳥取市 岸本 無人

玄関が音なく父が疲れてる
つまずいた小石けとばす意気もなし
綱引いた土地雑草を遊ばせる

今治市 渡辺 南奉

花から花蜜蜂恋を知りもせず
花活けて待てば匂いほめただけ
舌打ちを聞えぬふりで戸を閉める

大阪市 野田 君枝

綱渡りのようにマイカー買い替える
プライドがあつてここでは貝となる
友がいるしあわせ郵便受けの音

愛媛県 宮尾 みのり

安静へ春が来ているヒヤシンス
泣いたとは言えず男鼻をかみ
父ちゃんの昼寝へ汽車がつき当り

羽曳野市 麻野 幽玄

和歌山市 西山 幸

飛び越えた溝の深さはもう言わず

一枚の紙の重さよ約手切る
本物を手にしてからの迷いです

寝屋川市 香川 亜成

嘘はもうつきたくないと言う無口

はちきれそうな密柑はだかにして食べる

駅前売店で笑顔買うてくる

島根県 安達 潮音

診察を待つ間金魚の目になごむ

来る春に医者言葉も暖かい

いか釣りの留守居の妻へ時化する音

吹田市 藤原 世史春

玉砂利の音があとからついてくる

福寿草と猫が日なたにある平和

焼かれるまで藁にすがっている目刺

大和郡山市 今谷 紫園

紫の炎とみたり舞扇

ブーツ好し孫には履いてほしくなし

竹原市 大島 花炎

いざと言う時にエリート頼りなく

猛犬注意なるほど主は女なり

岡山市 柳原 孝柳

シクラメン咲いてる内は水をやり

抓られた跡だけ残った二日酔

岸和田市 池田 香珠夫

盆栽を並べた棚にある席次

大学で柿八年の席を持ち

尼崎市 中塚 喜甲

孫が泣く世にも哀れと聞こゆなり

言い勝って淋しさとなる父の寝顔

鳥取県 福田 保子

喜こばせ過ぎて出鱈目とは言えず

人一人おらぬ砂丘をみて通り

大和高田市 岸本 豊平次

もつともと思える嘘を作る義理

やけ酒がまだ日盛りを釜ヶ崎

岡山市 船越 汽水

歯車が狂わぬうちに天下り

妥協せぬ棘で一本だけ抜けぬ

長崎県 岩崎 和子

陽がさしてつらら哀れな顔になり

旅先の夫の声はやさしすぎ

松原市 北野 久子

腹据えて掛ってみても糠に釘

良妻と言う看板が揺れている

青森県 波 ただお

海の水春へ向って波さわぐ

判事補の六法全書泣いている

今治市 葛本 昌道

柱一つ一つに汗が染むローン

人並みに生きて可もなく不可もなし

鳥取県 加藤 茶人
切手まだ貼らず机に眠る恋

松江市 黒目 大鳥
明日こそは好きと言いたいペンを執り

松江市 本庄 快哉
新しい栗田誕生成人式
難居ビルお色直しのパーひらく

松江市 古田 鈍舟
住き日なり車も流れにさからわず
（長男繁行結婚一句）
パチンコの腕前知っている彼女

竹原市 小谷 清女
墨絵ならあの冬山もやさしそう
せめてもの救いお前がついて来る

大阪市 柴田 恵美子
登り行く坂で幸せ拾い上げ
共に泣く涙ちよっぴり持ち合せ

寝屋川市 森 和堂
バレンタイン業者に負んぶされた愛
早起きの冥加働く人を知る

亀岡市 松原 寿子
真実を吐けば手間暇いらぬもの
エゴ攻める言葉も別のエゴを持ち

和歌山市 紀美代
便り来る予感へ秒針冴えて来る
横向きの首は女が忍ぶとき

八尾市 田中 紀美代
定退の日から脚力降下線
陽に向けておむつ一番前に干し

尾鷲市 渡辺 伊津志
鐘つけば亡夫の声で跳ねかえり
女にも飲めない酒が欲しい夜
一口に呑んで土工の掌の太さ
旅の子のすぐ切るといふ赤電話

鳥取県 金川 満春
開筈は神話の山に駐車場
五割引日本に物が有り過ぎる

榎原市 西本 保夫
平社員のところのキズは軽くすみ
いやな事忘れるタイムカード押す
のんびりと空港の無い県に住み
伯仲となつて野党の大人めき

鳥取市 有田 鹿の子
スケッチをする間も雀じつとせず
世を拗ねた教祖の高で世を恨み

尾鷲市 渡辺 伊津志
写真帳滄桑の変ここに有り
群集のひとりひとりにある歴史

鳥取県 金川 満春
成人式すめば見合が待っている

唐津市 桑原 掬治
唐津市 山下 勝一

今治市 古野 伶人

唐津市 三浦 ひろ坊

唐津市 山下 勝一

唐津市 山下 勝一

遺児の目の風揚ぐ寒さに耐えており

唐津市 田中紫浪

肩書にころりと参るのも田舎

時々にはらみをきかずボスの猿

東広島市 石井さわ子

人形の春を並べて母を恋う

悩み話す女のつけまつ毛

枚方市 水野弘

神武景気魅力のあった死語となり

商社マンデスクの上に世界地図

大阪市 内藤ますえ

風媒花めしべを遠く訪ね行く

申し分けないがとうまい抗議する

西宮市 山田喜代子

春の風フト幸を投げてゆく

だんらんの電気ごたつで満足し

倉敷市 松井俊風

生甲斐はなくても朝はやってくる

金出来て金せびる子に恵まれず

羽咋市 三宅ろ亭

長びいた交渉周波数合わぬまま

引退を仄めかしつつしがみつき

岡山市 時末一灯

暗闇にコレステロールの喚声が

虹抱いて明日がだんだん怖くなり

西宮市 杉浦 婦美子

練りかえす鸚鵡の未練に負けました

道化師の素顔笑いが凍えてた

松江市 梅本 登美也

雑兵をポケットベルが追い立てる

ときどきはとぼけて老いの身を守る

新宮市 西尾 功

夜泣きそばの笛が気になるランニング

再起する心に広い海がある

岡山県 長尾 保

別々に何を祈っている夫婦

見えすいたお世辞やっぱり女です

大阪市 欄 蘭

恋愛の歌とも知らず兄は歌う

流行を追う手始めにブーツ買い

岸和田市 池田 露子

子育てを済ませて孫に的を替え

百万ドル夜景の底に鬼が住む

羽曳野市 岩橋 双虎

東低西高あと暫らくという勤め

剪定の庭木に春はまだ遠し

名古屋市 大林 曲ん手

平和主義壁は飽くまで白く塗る

この道の大家で正座が崩せない

泉佐野市 原 みい子

善意かと思えば裏のある話
大安の鯛風呂敷から顔を出し

日曜の七時は暗い事にする

風の子の不始末電線に風残し

灰色を剥ぐ雨になら濡れてゆく

手紙焚く炎は未練の彩で燃え

親類は断り他人が貸して呉れ

雪かけば声のしそうな妻の墓

傷つけた事など知らずばらの花

三日分溜めた日記に苦闘する

早立ちときまり寝返りばかりうち

事故現場照らす寒月澄み渡り

運動と思えば六階まで楽し

新潟県 高野 不二

下松市 徳光 秋人

滋賀県 柚木 踏草

倉敷市 藤原 健二

須賀川市 平栗 金太郎

島根県 飯塚 虎秋

豊中市 田中 善四郎

八戸市 島田 昭治

唐津市 田口 虹汀

今治市 大本 バット

今治市 伊藤 一郎

今治市 真山 国彦

共稼ぎらしい洗濯物に雪

枯木とは見えぬ樹水の花盛り

芳名録繰れば故人が名を連ね

悪人がずばりやられるテレビ好き

妥協する心を意地が許さない

孫の守ハンドバッグの口があく

慢性病知識ばかりが先に立ち

五十才黒留袖に紋をつけ

釣れますか愛嬌よいのに割り込まれ

雪ふれば納屋で仕事待っている

負けるとも知らず解説ほめまくり

日本髪美容院出るパンタロン

とぎされた雪に炬燵に和がうまれ

唐津市 岩下 照沖

唐津市 岩崎 実

大阪市 新川 貞祐

東予市 小山 悠泉

橋本市 田中 恒治

大阪市 平井 露芳

堺市 堀畑 日々子

鳥取市 勝山 紫宏

島根県 岩田 三和

寝屋川市 福富 隆子

山口県 高崎 雀声

松山市 岡崎 雪美

手料理で愛の告白受けてます

コマーシャル飽きあきさせて覚えられ

陽炎になってしまった雪女

慰の角度まるきり違ってる

洋風が日本の空をかけ回り

眼に見えぬ風憎らしい花吹雪

血圧の話明治のクラス会

信号待ち傍の地蔵に手を合わす

ほのぼのと機微はこころの温水器

正月の音もたてずに餅搗器

スチールの机が良いと親が決め

月うさぎなどと言う子はもういない

高松市 溝 淵 美紀子

宝塚市 吉 田 笑 女

出雲市 石 倉 芙 佐 子

岡山県 池 田 半 仙

姫路市 大 原 葉 香

富田林市 中 村 優

北九州市 三 上 春 雄

泉佐野市 大 工 静 子

橋本市 森 脇 善 彦

和歌山県 畑 下 寅 蔵

唐津市 古 谷 スツ子

唐津市 佐 々 木 久 隆

大阪府 文 川 一 念

一人でも嫌と言ってる腹の虫

テレビからふる里恋し頬かむり

焦点を絞れば負け犬になりそうで

駐車場園児のような名札下げ

素直さが削り取らる物価高

初ひまご生れてわが歳数えて見

傍線の競馬新聞春の椅子

きれいだと言をほめたら叱られそう

一杯会と名付けて酒豪ばかり寄り

★ コップ酒帰宅へ冷える分も注ぎ

出雲市 高 見 鐘 堂

出雲市 藤 井 晴 月

七尾市 松 高 秀 峰

尼崎市 駒 村 岳 麓

尼崎市 小 林 文 月

羽島市 伊 藤 静 枝

東大阪府 加 藤 千 代 子

倉敷市 斎 藤 通 風

出雲市 板 垣 夢 酔

上田市 金 子 吞 風

出稼の悪夢テレビに国の雪

今是所に居ると電話の一人旅

母からの借りを返せば只わらい
神棚へあげる思いもよらぬ金

大洲市 米 沢 曉 明

基地がそこにあっても罪を作らねば
鬼蜘蛛の殺意夕陽の赤が好き
裏向けておくと罫にもなる他人

東京都 池 口 吞 歩

だるまの目入れる瞬間泣いていた
危いと叫んだ時は転んでた
笑い合う小数点の打ちちがいが
点線は若人の夢未来像

岐阜市 市 川 鱗 魚

落ちこぼれ程に生きてる居職の灯
罪を消すわたしの鏡ふいて寝る

俺はまだ倅せらしいドキュメント
生きながらの地獄を知ったドキュメント
ドキュメント終れば派手なコマーション
ドキュメントまた疑問符のまま終り

山田季賛一周忌法要 大会
遺句集「鉄道草」発刊記念

日時 6月19日(日) 10時開門
場所 竹原市照蓮寺(駅より徒歩30分) 国
重文・日本百庭園の小祇園在り。

兼題 勲章・男盛り・メモ・新幹線・ひと
り旅。
出句 13時締切。各題二句。
献句 一句。席題なし(投句拝辞)
開會 16時

会費 千円(遺句集B6版一九二ページ。
御斎(おとき)発表誌等ふくむ)
当日の予定—安芸の小京都観光・希望者無料
—法要13時~14時—披講14時~16時。
連絡先〒725竹原市竹原町田中 山内静水

水煙抄について

菊 沢 小松園

四月号からまた私が水煙抄の選で皆様の句
と、毎月お目に掛ることになった。

御承知の通り水煙抄は川柳塔の同人以外の
方々に広く門戸を開放した一般の川柳愛好家
の窓口である。

水煙とは塔の屋上に高く突き出した五輪の

上の普通透し彫りの飾りもので、避雷針の無
かった時代の雷避けの人間の知恵を現したも
のと聞いて居る。無論、当時の先進国である
中国伝来のもので模様の中に、舞う天女と童
子の像があり、何れも笙や笛、胡弓等を持
って、天国より下界の人達の慰めの為めに唄
い、且、舞うとある。

私はこの水煙抄の中に皆様の句を通じて人
間界の見事な舞や唄を窺せて貰いたいとおも
うこと切である。

人間の願い切なく透し彫り

小松園

PRの欄

「川柳に笑いとユーモアをたっぷり」と
の運動展開中です。

カラフルな葉をのんで生きている

大阪府 堀 口 欣 一

値切る時大阪弁になっていた

尼崎市 大 垣 たもつ

こんなにも赤くなつたと蟹が恥じ

吹田市 藤 原 世史春

(伊丹市・ゆうもあ川柳会)

愛染帖

橘高薫風選

皮下脂肪女の欲が詰めてある寝る頃に三りんぼうを思い出す

和歌山市

桑原 道夫

踏切の線路に思う足の裏女がくれたユーモアの無い話

和歌山市

西山 幸

旅人はもう振り向かぬ百度石林訥な日本語温し老神父

和歌山市

松原 寿子

魚で良し一步一語の味で良し朱線引く彼方へ慕情閉じ込める

神戸市

宇佐美和子

父の背の半分に好きと書こうかな大正生れで小さな測を持つている

鳥取県

鈴木村颯子

紋付の中味は風呂であたたまり妻のもう植物図鑑に閉じられて

岡山県

出原 敬一

雪はじく竹に一揆の貌がある

八戸市

小泉 紫峰

愛の距離吹雪に乗って来た便り

伊丹市

榎谷 漫柳

串カツの先はこげ吾はサラリーマン

松江市

黒目 大鳥

スワン舞う双眼鏡を真白にす

大阪市

西出 一栄

闇を行く木枯し小さき音をつれ

神戸市

岩下 美樹

賑やかにかうたいひとりの傷深む

八尾市

大路 美幸

叱られた少年窓をあけ放つ

東大阪市

竹中 肖二

枯れきった胸へ染の音響かない

豊屋川市

小林鯛牙子

風花に甘えてしまふ瀬戸の海

岡山市

船越 汽水

チューリップ温みをくれる冬の部屋

堺市

高橋千万子

絆切る一人角力になるもよし

堺市

伏見 茂美

シャンデリヤ見上げエレベーターの人となる

出雲市

藤井 晴月

点滴テキテキ点滴テキテキとおちるもの

豊中市

戸田 古方

雪もよいかけてもかけても電話出す

豊中市

安藤寿美子

独り坐す広間障子が語り出す

枚方市

宮川 珠笑

チューリップ真つすぐ今日の証とす

富田林市

岩田 美代

春の海亡母を憶うてねむくなる

和歌山市

若宮 武雄

顔に似ず注射のうまい看護婦よ

八戸市

島田 昭治

焼香へ馬鹿ていねいに運刻して

新宮市

大矢 十郎

雪国の点は人なり線は森

羽曳野市

麻野 幽玄

新聞の隅で世間の裏拾う

和泉市

西岡 洛酔

黒川 紫香

中村 優

月原 宵明

河村 日満

田中 紫

山根 白星

小砂 白汀

高橋 夕花

工藤 甲吉

小出 智子

水粉 千翁

小幡 里風

野坂つき子

東京都

山根

白星

鳥根県

小砂

白汀

八尾市

高橋

夕花

青森市

工藤

甲吉

大阪府

小出

智子

倉敷市

水粉

千翁

倉敷市

小幡

里風

倉敷市

野坂

つき子

うらぶれて他人の心垣間見る

飯塚 虎秋

脱東京緞をにぎって波の音

堀江 正明

酒うましぶつぶつ雪の夜が煮え

堀江 芳子

子に貰い夫にあげて風邪は去に

白岩 文衛

運もなく根もないけどよく眠れ

岩崎 実

針山にすくなくなりし針の数

岩下 照沖

忘れたきこと忘れ得ず梅に付つ

渡辺伊津志

徳芒の触れ合い優し里言葉

竹中 綾女

妻のエゴ休ませたくない靴磨く

神夏磯道子

落伍した自分をせめている拍手

宮尾あいき

雲になるには白婢罪が重すぎる

欄 蘭

七分三分に皆勤賞と妻と分け

来住タカ子

ある誤解人を拒んで霜柱

松川 杜的

喫茶店で逢えば女であった妻

池田香珠夫

山の子が道を教えて栗をくれ

原田 一風

書き込んで出せば生き死に事が足り

新川 貞祐

内輪揉めしててもみり増える職

羽原 静歩

旭日昇天八方美人の名刺出す

ライターのキラメキ儘よ別の女

森脇 善彦

みの虫よお前かくれて卑怯もの

今村 夕路

残り物食べて留守番雑魚寝する

若柳 潮花

合槌を打つ職安の無表情

森田カズエ

鍵かけて行けと空果が吹けり

沢山 福水

追伸に追伸がある母の愛

直原七面山

我に似たか履き道楽の末娘

行天 千代

濁流の如く情報村をのみ

岩田 三和

姉の面つけると姉の意地がいり

池田 半仙

春の音ポトリポトリと雪解ける

榊原 秀子

積雪の中で炎えてる花日記

宮西 弥生

広告塔の寡黙右往左往を知り

三宅 ろ亭

ゴルフファーは按摩キャディーハサロ

原田 明春

ベルが鳴る一期一会の手を握る

田口 虹汀

よく見れば豚にもきれいのがおった

越智 一水

風邪の鼻みたいに詰まってる社の人事

都倉 求芽

愛のむち反抗心をつのらせる

馬場 魚山

栄転の寒き耐えてる北の国

長尾 保

蛸焼きの屋台に詩のある暮し

岩橋 双虎

趣味雑多息切れそうなおれの欲

小谷 清女

ばあちゃんの話へ孫が先回り

池田 露子

起きること知らぬ達磨は捨てられる

津田 与史

片言を聞いてうれい電話口

吉田 笑女

庭の草貫禄見せる京の昔

園田 正則

満艦飾男斜めに眺めてる

勝山 紫宏

大不況その上雪で死ぬ思い

紅 葉山

善人に童話恋しい星降る夜

藤原 健二

アルバイト社会科にない裏を知る

榎垣 岩光

大関を賭けた土俵が春を呼び

山下 勝一

山茶花の匂う裏庭妻の顔

高見 鐘堂

靴の下割れる氷の小気味よい

板垣 夢酔

裁く側今裁かれるニセ電話

錦織 文子

父祖の船すてて背広の色をよる

安達 潮音

施設の子羽根ふるわせるはぐれ鳥

松崎 公子

雪の幻想緋の毬だいた子と遊ぶ

三宅 不朽

1931年の収穫、自選三句集

日本柳壇百人撰

「川柳雜誌」昭和七年一月号から

路郎先生の第十三回忌厳修が来月にせまつたが、六頭目物故いらい、柳界も少し色が変わりつつあるのではないかとそれは別に、「川柳雜誌」の昭和七年一月号で「日本柳壇百人撰」というのが特集されている。今から四十五年前の作品集だが、これらの先達（ほとんどが故人）をしのびながら当時の佳句に接していただく。（原句のまま）
ABC順

大阪 麻生 路郎

恋の罨あゝの眼だらうか眼だらうか
なあちろりこれから秋に親しまう
酒とろりとろり大空のころろかも

大阪 麻生 葎乃

糸瓜もう水をとられる風と知り
飛行機は流れるせなの子は達者
赤いポスト君のハートに似て立てる

大阪 浅井 五葉

いゝ嫁を持って仰山繕ぎをあて
偏屈が三人寄った葉風呂
年の暮八百屋算盤おいて売り

守口 朝田 新水

表情を薄らぐ妻の添乳を見
内職の見本を見せた一ト苦勞
博士とて世間は見えぬ顕微鏡

大阪 阿部 閑生

外出へまだつかく〜と往診し
死魚の眼よ氷のなかに安らけし
我出てすぐしまる門淋しいぞ

松江 青砥 可明

出る船は出て船宿の安来拳
大掃除暫し汚れた昼の月
悪筆がいつそ若うに見えて恋

大阪 安西 杏三

棺側に友達一人居ればよし
纏りのない風景に子を連れて
売る本を抱へて踏切を越えぬ

朝鮮 蛭子 省二

七十二歳になり玉ふ
母がお酌をして呉れる我儘な年だ
愛犬と誓す

喧嘩好きの犬に屈辱のない暮
旧正月にあんまるとる瘦せよう
老書生の閑居

京都 藤本 清造

あまじて叱られる金の金を出し
検札のお手やはらかに起こしかけ
玄関に位負けせぬやうに立ち

東京 藤島 茶六

部屋の灯が揺がって来る祝い事
杜を離れて学校のばんざい
傷口へ惶惶としてこの日逝く

大阪 福田山雨楼

いかなごうまい子の箸親の箸
刀根山を訪れて
廊下を折れて折れてさびしむ
日輪草倒けた姿が支那に似る

青森 後藤蝶五郎

寝てよし起きてよし春に包まれる
詐欺をするのかと貧乏おどかさ
いきまいて見て淋しさへ突当り

大阪 本田溪花坊

雪た、れ朽ちて結核菌おどる
落飾の日がらに春の彼岸来る
ひと、きの願想さくら咲く散る日

大阪 橋本 緑雨

禍はひを恐れ女は黙って居
圧迫もあろうが親も妻も子も
秋風にすゝきも我もさからはず

大阪 堀口 塊人

いさゝかの金で嬉しくなる世帯
さざなみは夜の長屋の水たまり
進歩する時代の底に三世相

福島 久田 狂水

暮に出て東京駅の春に着き
民事部に懲をはなれた顔もなし

見習はメスに流れる血に慌て

神戸

日野 華水

断言へ念をおしてゐる真の友

巫の子へ旗を渡したちんどんや
子を負うてお寺の参りの日が暮れる

二人寝に飽き一人寝のそれも飽き
三井でもちやりんくはともした鏡

日は西に月はまだ出ぬ世紀末

円光のほの白き貧血の空

空ろ心へ血は澄んでさかのぼり
遅しさばかりを男武器にする

遅しきアジアとなつて吹雪く夜
一つ消え二つ消え三つ消へる泡

細胞となつて地中に潜ぐる影

伸び上つてもお正月は見へず
聖書には雀でさへと書いてある

感激の女は乳へ息を溜め

ねむり草の様な女に慕はれて
すこやかに寂しい秋の旅で寝る

ロボットの様な男で蓄めて居る

空と地とつなぐ都会の軽気球
情痴の風景にリップステイックが折れてゐた

まるれえぬいでいとりに挿ぐ
秋の女灰となりゆく煙草すふ

酔ひがきめたら嵐をききなさい
お寺の屋根が昔の月を慕つてゐる

木の葉の青き団結せよといふ

大阪

大阪

大阪

大阪

大阪

大阪

大阪

大阪は号外配る旅戻り
妓一せいに鮎の骨をぬき
いさかひのまだひとと言は午前二時

友だちのうしろ姿の有難味
嬉しやな子供を抱いて陽を探し

赤ん坊の正月は只陽が当り

世渡りさ。豊蕪の焼加減

山の湯の静けさ己が臍に合ひ
自分だけ笑ひマイクロホンへ洒落

泣いてみてふつと手摺の面白さ
何といふ虫かと仲がなほりかけ

ふと歩行くもとの我家のかしや札

腹のいゝ男で嘘を云へず寝る
苦しみの底に笑つてくれる妻

てっか巻三つ目鼻へ強く来る

これこれ雑魚ども月がかけたのだ
かぞへみて追に重き指と知る

秋は去る湯殿の梁を伝ひつゝ

頬杖のたゞ一心に思ふこと
早速に思ひ出せない父の年

此頃はほけたと云つてぼけてゐず

こゝろの鎧着るは淋しき
バット級レイオン級はまだ娘し

嫂の涙が走りもとで落ち

昔々蚯蚓は土に寝すごして
晒臍よ汝の世より食ふ淀

寝にかへる鳥へ高い山低い山

大阪

大阪

大阪

大阪

大阪

川上三太郎

近藤鮎子

食満 南北

亀井花童子

木村半文銭

小林不浪人

桑原 京郎

龜山宝年坊

愛知

別府

弟子の眼に師匠の水解けかゝり
瘦せ腕をしみんと思ふコップ酒
薄情な前へ財布がどぎろり落ち

教師フト笑ひを窓の外へ捨て
文化村三越製の嫁が来る

女房の寝顔にすまぬ世帯寝

三軒の中が空いてるまゝで冬
妻の時いた薺草の喜び

見つめるる菊の心になりかゝり

台所更けて柄杓の沈む音
籐椅子に露けき夜空覚えつゝ

しらんく雪の障子の夕づくり

僕とこが困る丈けさと貸してやり
肺だからよると云へば涙ぐみ

秋風の吹くにまかせて柳散る

静うかな心小鳥と話せさう
かさくゝと母の掌冬が来る

困へ夫の影の貧し過ぎ

おとなしい客はマッチを擦らすだけ
売れぬ妓と売れぬ妓夢の話する

縫ひながら聞けば糸屑など拾ひ

軛寝の夜あたゝかき松の内

熱の子にみんな居るよと云ひきかせ

手の筋も淋しい時の足しになり

加藤 文酔

金子 呑風

神尾 三林

河柳 雨吉

木村 晃卓

北村白眼子

喜多 春秋

大阪 松盛 琴人

鍵すてる心になって合掌し
労働を売らぬ日といふメーデーの埃り
死線を越えてカンテキを煽いでる

東京 村田 周魚

家に居て飲んでればいゝ星まわり
叱れても雪やこんこん子の素足
硝子戸のくもりピアノも冬の音

松山 前田 五健 (社選)

落ちついて喚げば矢つ張り金の呼吸
關ひの美へ水を打つ武徳殿
好色にされて笑つた顔の艶

京城 正木柳建寺

眼薬にしゃれ絵日傘先を行く
近所では産後の無理を知つて居る
叱つては見たが添はせる伯父の腹

大阪 松丘 町二

噓して妻の笑の処女に似る
漬物の音ばかりなる夜の膳
夕べ疲れた屋根がごちゃ／＼とある

東京 三浦太郎丸

春暁をばつちり眼覚む繚繚よし
子の下駄の無事に脱がれて夜が深い
大晦日馬のまどろむ日向あり

備前 三村叱叱郎

焼け跡の燻ぶるゝまゝに星黒し
諦めに似しかなしみを引つ被り
小春日の墓地の暖かさがうれし

大阪 森 雞牛子

地の上の五尺高さにある世間
おだやかな波に日本洗はれる
木枯に倶楽部あか／＼灯るなり

大阪 水谷 鮎美

善人にすぐれてあをき松の風
おちついて居れば鼠にのぞかれる

幸福の傘さしてゆく人の呼吸

大阪

森 東魚 (社選)

眉唾だぞと漫談へ槍が出る
いつそもうシャンで女流のダイビング
夫婦伸鉄と鉄ではあるまいが

横浜

村上余念坊

死なせともなき母へ又冬迫る
意志が通じた啞朗らかに笑ひ
ハイヒール同士水虫をかこち

大阪

増位 汀柳

黙しゐるその情熱をさそう唇
鳴る音のさびしい瘦せた人の骨
青い空にさわつてみた手のひら

宮津

宮城 啞亭

龍甲の贅へ盛装出来上り
売れただけ鳴らして包む陶磁器部
軍艦ももう寝たらしい灯に替り

松山

三好 計加

鶴嘴の並んでおちるのを見とり
煙突の煙りこちらへ許り来て
ステッキで蛙つゝいてみたりする

兵庫

長崎 柳秀

別人のやうに迷信金をを出し
初雪の庭父を呼び母を呼び
からこうた後の涙を試いてやり

東京

西島 〇丸

どうしたら敵が愛せる仏の灯
ひっそりと二階に病で唄をきき
初日の出心に聴る事はかり

鳥取

中島 鉄洲 (社選)

二十年妻の素顔も尊くて
益磨く前に居眠る母おはす
彼不感自制もなくて灯をくゞり

京都

布部 幸男 (社選)

うちで呑む夜がつゞいて二月来る

スタートに似て交叉点青を待ち
バスを待つ雫のなかの兎の玩具

東京

中村 山門 (社選)

擦れ違ふ心豊かな春の人
天才児自殺をすると出たつきり
親し気に郵便が来る夕時雨

高知

中沢 濁水

浄瑠璃に映らむ姿おもふ歸
眠られぬ闇の深さを庭に見る
可笑しさをたえ／＼に告げ泣いてゐる

朝鮮

中内 如空

けなされて豚と住まうかとも感じ
筆もつて今更うそのむづかゆき
めつきりと肥つて一つ苦が嵩み

神戸

西村 明珠

実印を一つおしたる年の暮
みにくさに女子大学を出てしまひ
障子張り／＼転宅がしたし

大阪

中見 光路

繫がれた菜箸に似し夫婦とも
春の壁よせめて疲れを知つてくれ
属蘇微醺国旗にくるゝ家を辞し

大連

大島 濤明

我が愛の盆に溢れる子の笑顔
何時の世に野山へ帰へる牛や馬
文字のない世界で唄ふほんとの詩

福島

大谷 五花村

とりいれが済んだ困奸裏の暖かさ
徳利が重たく見えて胃が悪ろし
五分刻に禿の隠せぬ初年兵

大阪

大石 文久

糸車から風景は稲ばり
宵の色小唄の宵の流し元
麗人の愚痴白粉の事を聴く

名古屋

岡本 映絲

じつと見て居ると女に髯があり
近頃の自分が映る茶碗酒
手馴づけるまでの女将の親切味

大 阪
小田 夢路

正月へ怪しき生花の久し振り
灯がつけば朝の眠きを忘れたり
絵にされる土筆の姿ながみじか

大 阪
落合六文銭

はかなくも思ひ出せない瞳を慕ふ
満ちて来る潮うね／＼陽を乗せて
何か待たる、菊の装ひ

大 阪
阪井久良岐

市川
関犬と競馬の中で句を作り

千 葉
山林に久しく餓えた目を見張り

千 葉
相元 紋太

甲 府
一日で甲府葡萄に飽きるところ

神 戸
借金を思ひ出したり忘れたり

大 阪
ストップに出過ぎた線へ立すくみ

大 阪
庄 萬よし

特高に戦旗改造資本論
警察の立場でつべんからの声
戦術の一つ検束されて行き

甲 府
篠原 春雨

桃割に結わせる母で切り直し
売菓の袋うどんの露に濡れ
社会課の指揮で涙の餅を掲ぎ

京 都
齋藤 松窓

着るもの、持つもの、数春の娘に
足袋を履く時にみだらな廿四五
長男の紺緋から秋が立ち

大 阪
住田 乱耽

油絵に塗りこめられた巡邏兵
ダラ幹をのせた夜汽車の赤い煙
翼の端もつ獣人の鼻の尖

大 連
佐々木三福

北風にむんずと組んで出る隊ぎ
弾道のさきに転んでゐるいのち
恙く今日も軌道へ戻りつつき

横 浜
柴田五万石

童心になれば明るい事ばかり
諦めて暮らす浮世は面白い
支那は又戦争だげな桜咲く

大 阪
関本 雅幽

鐘紡の煙の下で咲くバラよ
二三万持ってラヂオで体操し
秋晴れの車輪も稼ぐものに見え

神 戸
三条東洋鬼

雨は黒しルンペンの唄ふ声
秋の空借金ぐらい恐れまい
父のない子が靴音へ眼を覚し

一分間の柳論

「いのちある句」とは作句にあたって何
らかの心の衝動があつてこそ生れるものだ
と信じています。そしてその衝動を心に深
く沈め温めて充分発酵させながら普遍性を
加えてこれを読む人聞く人に正確に伝え得
る言葉を選びえたとか。拙句のそれぞれを
省みるときに日常生活の中で何らかの拍子
に受けた感動や目に触れた発見などによつ
て心に衝動を受けて生まれた句と締切りに

大 阪
あちこちで聴いた話で笑はせる
二階から子供の連れの母を見る
考へてゐると木蔭の面白さ

大 阪
塩路 吉丁

お前居ず錦帯橋を寒うふみ
ダイヤのみ光らせてゐて子を抱かず
たんばほを吹けば心配飛んでゆき

大 阪
桜井 円角

竹の子を見上げて笑ふ数の風
足音に眼高の列は向う岸
雨漏りは釈迦も仏も知らぬ貌

大 阪
高木角恋坊

元日の足袋は着物の上に乗る
石鹼の泡から男顔を出し
美粧院好い奥様にして返し

大 阪
高橋かほる

慰める友達先へ酔が出る
金の他にも転職を阻むもの

東 京
塚越 迷亭

宮川珠笑

追われて想像や思考によつて創った句とは
句帳の中で輝きさえ異なります。生活のちり
を吸い込んだペールによつてやもすれば
鈍りがちな感受性を洗い清めて平凡な物の
中にも先輩の見出しなかつた意義を見出し
恍惚し心の衝動に導く精神力を養いたい
のです。牛歩ながら「いのちある句」を一
句句を求めたために常に川柳から目を離さず
句材を求めた感受性については万年少年た
らんと念じております。

或る時は涙もろさへつづけまされ

大阪

竹内 多聞

(社選)

ギラトの顔で儲けた話なり

親切の採み掌にこぼれるばかりなり

満足は兎のやうに飛んで去に

東京

寺井紅太郎

(社選)

寄せ鍋のいろどりに似た差向ひ

友達の顔を浮べて旅の酒

火が水に負けた音なり水こころ

東京

高島玉兔朗

急かされてる紺屋草月が真盛

大晦日一の得意は遂に留守

あゝ云へば斯う云ふ番の根が痒い

長野

高峰 柳児

境遇の話どつちも困詛り

慰さめてやれば失恋ちと惚け

眞がねば統かぬ恋を惚気たり

東京

海野夢一仏

他人の子を親に返した手が寒い

あけすけに笑へる心豊かにて

髪洗ふ妻に久しい肩のこり

石川

上野 錦水

水音に心忙しい日暮かた

頼られる男にいつかなつてゐた

どつかりと椅子へ身を投げ金が要る

天津

和田黙然人

切れ風の糸淋しくも巻かれたる

ひやかして買ふ阿弥陀様五十仙

赤化していゝか茶碗にきいてみる

金沢

安川久流美

貧しさの中へ玩具の獅子頭

梅干に凹んだめしの有難さ

とりいれの中に不平の児が泣くよ

大阪

安井ひろし

妻待つ如く夕には帰る

家内中児をまん中に笑ひ声

アナクロのシンボルよコンクリートの城

三毛に膝貸して果敢なき酔心地

物みな呪はしく春の宵道り

三座今へブメントへ吐き出され

東京

八十島杜若

梅咲けば桃よ移気捨ててに出る

砂を掘って埋れてみたり匍つてもみたり

ぬぐひえず涙落ち落ち去ぬる選手ら

春の陽へ田螺も向きを替えて昼

淋しさは子の命日へ曇るなり

振向いた錦魚が金に光るなり

京 横山巷頭子

金魚鉢金魚驕りの色を見せ

母よりも伸びて高等女学生

ドライブの機嫌は西条八十の眼

半数はさくらの様な味方も居

こほろぎへ膝が淋しくなる女

責任は重く袴の皺が出来

希望あり恋あり父の気と合はず

金がほしいと思ふ日は雨が降り

雑巾の匂ひ編上まだ穿けず

大阪

楊井 二南

我が柳壇の戦跡を一目瞭然たらしめるため

一九三一年の作家一百人を選んで三句集を編

んだ。その人選については編輯局でも議論に

花が咲いたが、一ト先づ以上の人々が選ばれ

た人となつたわけである。かなり有名で人選

に漏れた人もあるが、それ等の人々は一九三

三

大阪

山上 月下

一年度に於て休火山状態にあつたものと思は

れた。尤も大して活躍してゐなくてもその

名を逸するにしのびない人もあつたので、そ

の少数は拾つて置いた。来るべき一九三二年

の活躍を期待する。この事業の完成を期すべ

く早速玉句を寄せられた諸氏に対し感謝の意

を捧げる。

猶、玉句の不着に対しては社選としたこと

を諒とされたい。住所不明のため人選洩れと

なつた人に対しては次期に於て完璧を期する

こととし御寛恕を乞ふ次第である。

☆

(右の原稿は路郎先生が書かれたようだが、

この種の特集は困難の一語につきるものとお

もう。その後、このような企画が他社にもあ

つたが、路郎先生がはずされてゐる百人集だ

つた。川柳界とは、そういうものかも知れな

い。

(不二田一三夫・整理)

黄銅六角ボールトナツト
及び特殊換物全般

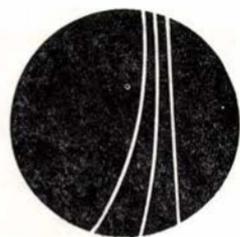
合資 西出螺子製作所
会社

大阪市天王寺区空堀町八番地

TEL (06) 三四五二〇四

夜間 (06) 四四〇八

麻生路郎先生
13回忌厳修と
「旅人」とその後の
作品普及版刊行記念



誌寿六百号記念

川柳
大会

日時 昭和52年5月8日(日)
午後1時

会場 森ノ宮労働会館

(環状線森ノ宮駅、又は地下鉄森ノ宮駅下車スグ)

司会 西田柳宏子
開会の辞 川村好郎

第1部

挨拶 中島生々庵
講演 東野大八氏

堀口塊人氏
兼題 「家族」 田中秀果氏選
「趣味」 増井不二也氏選

第2部

講演 右城暮石氏
小野十三郎氏

兼題 「信」 三条東洋樹氏選
「ワンマン」 近江砂人氏選
「旅人」 西尾棗選
(各2句)

閉会の辞 若本多久志

会費 1,000円 (句集「旅人」普及版呈)

懇親宴 2,000円

主催 川柳塔社

写真前列右から―百酒・花梢・あいき・夕花・
智子―後列右から―二三・鬼燈・美幸・多久
志・牧人・ベスト10の諸氏。



春は大萬川柳大会から―毎年同じサブタ
イトルなのではずしてみたが、やはりこれを
入れないとペンが進まない。毎冬寒さに痛め
つけられ、春よ早く来いノそんな願いのうち
に「大萬川柳大会」が来ると春が訪れる。だ

第24回 大萬川柳大会

―松江梅里10周年追悼句会

昭和52年2月27日
会場 割烹大萬

から川柳家は「大萬川柳大会」の来るのが待
ち選いわけ。ことしは2月27日午後一時か
ら春が訪れた。

88名出席という新記録である。司会は毎年
栗氏だが、おはなし「梅里を語る」があるた
め、ことしは柳宏子氏が司会。

閉会の辞はいつもの多久志氏だが、今大会
には宿願のベスト10入りを果たされ、ひと味
ちがう開会のことばとなる。

柳話の生々庵主幹は、第一回大会で見事入
賞されたが欠席投句のため、賞品の一升ビン
が当日の出席投句にふるまわれたということ
である。(二十五年前という、戦後五年だか
ら一升ビンは貴重品だった)今は路郎先生や
梅里さん知らない人もいるので、その人物
像などをことばで画くように話された。

栗氏は梅里さんとは飲み仲間でもあり、思
い出ばなしは豊富である。

旅行談あり艶福ばなしありで、いつかは未
公開のもの披露をされるであろうが、仕事も
趣味も第一流だった梅里さんの思い出は短時
間では語りきれないとあった。そんな中から

42年8月号の川柳塔から、その弔句の数々を
披露。霞乃先生はじめ各社の方々や、本社幹
部諸氏の切々と打つ五七五に胸の痛みを覚え
たことである。

生々庵主幹が柳話の中で「大萬川柳にも危
機があった」といわれたが、第一回の危機は
路郎先生の逝去だった。名選者を失ったこと
で解消の余儀なきに至るか、ということであ
ったが、それを清水白柳氏が担当され、大萬
川柳の健在ぶりを示めされたものの、その白
柳氏が六年後の45年11月に急逝され第2回目
の危機が来たのである。それを年々出席記録
を更新する隆盛にみちびいたのが夷兄好郎氏
であったことは衆知の事実で、大萬川柳好郎
選は柳界の異色として、今日より明日へと飛
躍を約束するのである。

二代目さん(松江克美氏)が謝辞に立たれ
たが、お店はますます発展途上であり、故人
の10周年追悼句会の記事の中で、おめでとう
とは活字にしにくい、これより言葉が見つ
からない。毎年おなじようになるが、この大
萬川柳大会には「川柳塔」の最高幹部総出席

というのが、これがまた「名物」にさえなっているのは、好郎氏や家族の方々の熱意がそうさせたのであろう。(一度書いたことがあるが、好郎一家の中に社長さんがおられ、この方が下足係りをされているのには足のはれる思いがするのである)

梅里さんのありし日の都々逸などがテープから流れ、場内はシーンと静まり、しばらくはその美声に聞き惚れたものである。栞氏が云われる超一流がここにもある。

打倒藤岡花梢さんにもえてのことか、八尾組の活躍は目ざましいものがあつた。そのスターたち、第一位の大路美幸氏、高杉鬼遊氏とつづいたが、三年連続第一位の花梢さんが第三位にふみとどまり、花梢川柳健在を示めされたのはさすがであつた。

当日の三才と軸吟

(右から人・地・天位・軸吟)

席題「ふる里」

島居百酒選

ふるさとも母校も遠くなる出世

好郎

青雲の夢ふる里を振り向かず

好郎

負け犬が知るふる里のあたたか味

美幸

ふる里の落書あの日を呼びもどし

高橋夕花選

席題「梅」

酔々

A席もB席もなく梅匂う
母の忌の梅りんと開くなり
盆梅に天女を思ふ軽い酔

冬二
弘生

梅匂う恋には遠き人と坐す

好一(代選薫風氏)、牧人、夕花、百酒、あいき、多久志、智子諸氏がそれぞれベスト10のトロフィに輝き、また大萬川柳の清記ベスト10で裏方さんぶりをつとめた藤井一二三、河内天笑両氏にも好郎氏の手から感謝の記念品がおくられた。好郎氏の謝辞も閉会の辞の小松園氏もユーモアたっぷり、まこと和氣あいあい、今日の穩やかな春の日を思わせるものがあった。

実力で選者の座につく大萬川柳大会の披露が新しい顔ぶれで句座をわかせる。

いわゆる第二部というのがベスト10招待懇親宴である。柳宏子氏司会の「川柳塔座」の出演である。村田颯太氏が今回は「金色夜叉」の紙芝居である。大正時代の学生演歌師よる

兼題「料理」

小浜牧人選

お茶漬を食べに板前さんが来る

天笑

働いたうまさへ煮える鍋料理

柳志

手料理のそのまん中にいる私

千万子

手料理にこもる心が味となり

千万子

兼題「喉」

飛田好一選

謝罪文喉につかえたたま帰る

泰

拘置所で癒した喉で選挙戦

太茂津

塔を見るおんなやさしい喉を持ち

冬二

任侠は男のロマン喉仏

藤岡花梢選

兼題「十年」

千梢

しく、学帽にハカマ、小さなバイオリン片手に「熱海の海岸散歩する……から、絵画をほさんでの熱演である。ベスト10の方々がハンドマイク片手に美声を競いあい大萬川柳ならではの雰囲気がいっぱいある。特に、遠来倉吉市の奥谷弘朗氏が、泉詩朗ばりの名調子で、「月形半平太」を美声に乗せ、満場から拍手を浴びる特別出演もあった。

岡山からの常連、西山朝二氏ほか、他社の方々の友情出席が、この大会を盛り上げる原動力にもなったことに対し、主催者側も感激されたにちがいない。(ペン・一三夫・カメラ・岳人)

「漫才」

第6号四月八日発売。三百円。送料二百円(不二田一三宛)

俺は走り妻は歩いて来た十年
十年経っても女は時効とはしない
ときめきのない十年の女坂

兼題「万」

高杉鬼遊選

巨万の富に媚がる敬語をもっている
万言のついでやしてなお愛という
万雷の拍手に冷い音もある
万のつく金へお辞儀を深くする

兼題「伝統」

大路美幸選

極道が帰る伝統緒くと云う
伝統の椅子が軋むと誰か逝く
伝統の壺ある部屋は灯がつかず
伝統の漬物樽に母が居る

冬二
弥生

進 級

高津徹也選

進級に洩れてはいない実力者 夕路
 進級をあたりまえやと思てるが 古方
 進級を位はいに告げる母子家庭 春雄
 進級で恋に仕切りの壁ができ 善彦
 進級に下取りのないランドセル 優
 進級の子らに家計の苦を忘れ 豊生
 進級へ背丈がほしい親の欲 素身郎
 進級を信じる母の目がぬくい カズエ
 進級に時計万年筆笑い 漫柳
 進級した子へ入試追いかける 思月
 進級はせぬのに髭が生えてきた 方大
 いばられた通りにいばる三年生 どんたく
 進級をさせる師匠の胸算用 どんたく
 進級はもう襟章を買っており ろ亭
 進級の早さに強い風当り 右近
 進級は親にまかせて遊んでる 雀声
 進級でくじけた夢をとりもどし 代仕男
 進級に体育だけが五で威張る 三和
 進級の朝制服を見せにくる 俊風
 新学年あの先生がいなくなる 鯛牙子
 進級の試験へお守りどれか利く 無人

留年が杞憂に終った美味いめし 眺明
 お師匠はん小言のわりに級を急ぎ みのる
 進級へ後一年の学資組む 悠泉
 進級にもれた重たい靴を穿く 悠泉
 進級に背のびして見る四月明け 洛醉
 進級の祝い言葉と花だより 貞祐
 手習いへ進級証書春の彩 健二
 進級の写真を飾る猫柳 宵明
 努力を期待進級へ甘い点 翁童
 進級を父当然の顔で聞く 国彦
 進級が出来て当分遊べます 国彦
 進級へ学費値上げが待っている パット
 進級のお礼直立不動なり 虹汀
 初恋の淡く消え去り進級す 照沖
 母子家庭新聞少年進級す 照沖
 学帽をあみだに冠り進級す 照沖
 進級に汚れがめだつ机です 重人
 進級の方は見向きもしてくれず 可住
 進級へ別なライバル待っている 肖二
 進級の子を母親として祝い 秀峰
 戦死したみやげさびしい二階級 祥月

住

一命と引替えに来た二階級 本蔭樟
 進級は矢張り嬉しい養護の子 松花
 偉うなった積り二年生の自信 無鬼
 トントンと進級友が逃げて行く 道子
 進級に心静かに墨をすり 和子

神妙にガキ大将が進級し 鯛牙子
 地 進級の若さを包む春温くし 軒太楼
 天 進級にあと一年と縫い急ぐ 潮音
 軸 進級という小さな川を跳び越える

花まつり

渡辺独歩選

接待の甘茶人出の花まつり 祥月
 天地人浮々困んで花まつり 秀峰
 青い瞳の子もまじってる花まつり 方大
 花まつりすんでお寺に経の声 度
 花まつり甘茶の雨に釈迦は濡れ 綾女
 花まつり私も釈迦の日に生れ 七面山
 もう甘茶飽きたあきたとお釈迦様 無鬼
 花まつり釈迦を知らない子が唄い 悠泉
 戦争を知らない子等で花まつり 花炎
 花まつり善男善女スリも居り 芳仙
 花まつり満開という花の下 豊生
 花まつり歌に合わして舞う落花 雅風
 花まつり顔顔の角がとれ 茶人
 商店街片棒かつぐ花まつり 素身郎

花まつり 去年の友がもう居ない
霞から鐘がけだるい花まつり
売出しもあるとは知らぬお釈迦様
童画では白象がいる花まつり
旅人も寄り村堂の花まつり
花まつり 慈悲の甘茶に手がのびる
手踊りの輪が拡がって花まつり
花まつり 花の心は知らぬまま
古都に住む喜びおもう花まつり
甘茶でも浮かれたくなる花まつり
甘茶が手から離れた花まつり
そそがれた甘茶に釈迦もご満足
嬉しそう甘茶の中のお釈迦さま
花まつり 館を蝶も訪れる
甘茶ふくむみな善人の顔となる
花まつり 余韻空まで花霞
花まつり 老母は童女の顔となる
花まつり 釈迦は甘茶に酔うている

可住 宵明 不二 古方 善彦 洛醉 双虎 道子 カズエ 優 代仕男 夢醉 虹汀 右近 肖二 白水 カズエ 春日

花まつり 蝶一番に舞うて行き
お釈迦様濡れつ放しの花まつり
花まつり ふっと心を洗われる
南から北へ旅する花まつり
花まつり 釈迦小さくも天を指し

本蔭樺 保夫 重人 どんたく 伶人

花まつり 久方振りの法話きく

夕路

老若の心をつなぐ花まつり

伊津志

花 御堂釈迦の笑顔にふれに行く
花まつり 甘茶に幼ない日が甦える

潮音 独歩

宇宙 科学 戦米ソが競う宇宙船
星空に宇宙の広さ教えられ
地球というあまたも抱く宇宙
宇宙の塵はよし精一ばい生き抜こう
少年の夢は宇宙を駆けめぐり
SFを読んで宇宙を遊泳す
宇宙食ですませた程忙がしい
とんで行く過去から未来へ流れ星
宇宙船月から兎追いほらい
種切れの漫画宇宙で稼ぎ出し
プラネタリウム宇宙の夜を科学する
本質がわかれば宇宙不滅なり
無限大無限子僕の宇宙はどのへんか
宇宙中継世界を隣組にする
謎深い銀河の帯にある魅惑
人智進むと宇宙益々広がる
宇宙にも縄張りがある研究陣

恒治 伶人 可住 重人 思月 弘 一風 ひろ坊 無人 伊津志 岩光 和堂 古方 正則 右近 綾女 秀峰

村田 瓢太 選

天体をきわめ家計のこと知らず
地球滅んでも宇宙知らん顔だろう
大宇宙のちりのかけらと言う私
不思議とは宇宙のための言葉かも
全エネルギーを宇宙の果てまで大日輪

俊風 パット 七面山 静枝 照神

書き初めに宇宙と書いた子の瞳
人間に夢を抱かせる大宇宙
宇宙など構わず蜂は花を飛び
宇宙の中のちいさな星で憎みあい
終着のない宇宙への科学陣

潮音 春日 漫柳 素身郎 雅風

少年の 大志宇宙に負けまいぞ
冬ごもり 世界も宇宙も遠き縁
父母の 愛宇宙が如何に広しとも
宇宙の外になお宇宙あり無限

翁重 貞祐 方大

水客・潮花・紫香三人の整理句集

『我楽苦多』 自家製版 非売品
三氏のミニ随筆や句が収められ「我楽苦多」はメモのような真「わらじ」は旅のすべて「思い出」は人生記録など。毎月少数発行とのこと。(〒661 尼崎市 武庫町一丁目四七の一五黒川紫香)

初歩教室

題 — 「青」 —

本田恵二郎

古くからの伝統や慣習から一歩抜け出したものを発見したいと意欲することは激えるべきであるが、それを適確に実行に移すことは仲々むづかしいものである。自分では前進したものをつかんでゐる気でも、三者的立場から見ると、新生の息吹きとは見えない。

それは表面だけの新しさであつて、その内容は、あまり変りばえていないと見えるものが多いものである。流行を着ても、肉体の線を変貌させただけで、心は旧態依然といふのでは、垢抜けた品格がないのと同様だと思える。そんなことを思い浮べながら川柳鑑賞をこころみる。そして川柳のむづかしさを再確認してみる私である。そして又、マイペース（それぞれの個性）に磨きをかける努力が一番肝要だと強調する私でもある。

舞い上る雲雀へ空は青く澄む
（青空が雲雀の声を殴り上げる）
静脈は青いが気性の強い女
（気の強い女の静脈青く浮く）
青田刈り不況の風が手を控え

同 双 虎
潮 音

（青田刈の鎌にぶらせた不況風）
病み上り腹一杯に青い空

（胸一杯青空吸い込み快復期）
青苔の落葉かるくかるく掃き

（青苔をいたわるように落葉掃く）
青一色に歴史を沈めた海の貌

（源平の歴史を沈めた海の青）
あつたかいたムード消えた青壺

（青春のムード消えた中汗臭き）
（青春のファイトもり汗臭い）

（青春は唯汗臭いものだった）
（汗臭い青春シャワーの音さえる）

（汗臭い青春シャワーの音さえる）
人並にパンダも青春待たれてる

（衆望の青春パンダはまだ知らず）
（青笹でパンダの青春呼び出せず）

（青笹でパンダの青春呼び出せず）
青臭い奴にも一分の理があつて

（青臭い奴にも一分の理があつて）
（そと海の青の濃さに怖くなる）

（そと海の青の濃さに怖くなる）
青春の無かつた父が待つ老後

（青春の無かつた父が待つ老後）
（青春の無かつた父に老いせまる）

（青春の無かつた父に老いせまる）
住み替えて空の青さを嬉しがり

（住み替えて空の青さを嬉しがり）
（住みかえて空の青さへ凱歌あげ）

（住みかえて空の青さへ凱歌あげ）
（住みかえて空の青さへ凱歌あげ）

同

久 栄

同

紀美代

同

那智子

同

昭 治

同

茂 美

同

花 炎

同

俊 風

同

同

同

明治婦の静かなりし恋なき青春

（恋知らぬ明治の青春いとおしむ）

（恋知らぬ青春明治は遠くなり）

静 子

同

紫 園

同

江 水

同

功 太

同

飄 太

同

保 夫

同

鎮 彦

同

正 則

同

静 佳

(青空を画布に少年夢を描く)
 (少年の夢 青空に描きながら)
 青春のもたえナナハンだけが知り
 (青春のはけ口 ナナハンの排気筒)
 白砂青松石油基地
 (白砂青松石油基地になりさがり)
 青空のある故郷のありがたし
 (ふる里に青空があり 誇りとも)
 青春の過去は山河にまだ残り
 (わが青春 里の山河に生きている)
 アランドロンのブルーの瞳に吸い込まれ
 青春譜過去の日記に呼びかける
 (青春譜奏でてくれる古日記)
 青い目のうまい日本語に虚をつかれ
 青畳絨毯の下で売げ残り
 (青畳絨毯の下で世を嘆き)
 (絨毯の下で青畳が嘆く)
 青雲の想いへ遠く家業継ぐ
 信号の青に決意の歩巾とる
 (信号は青だ それ行けが心)
 青空へ主婦喜びの白を干す
 (白く干す主婦へ青空笑みかける)
 深酒へ病む青空の志
 (深酒へ青雲のこころ破れ病む)
 青春の思い出筆が先走る
 青い鳥我が家の止り木いやなのか
 青い鳥うちの止り木きらいらし
 (青虫の食い気まだまだ恋知らず
 病葉の青き昔のことしきり
 (わくら葉の昔の青を偲ぶ日も)

翁 童
 静 泉
 同 寿 子
 同 静 江
 同 柳 五 郎
 同 健 二
 同 岳 麓
 同 文 子
 同 子

嘘に嘘かさねて女青さめる
 名工の心気青磁の艶に澄み
 (名工のこころ青磁の肌に染み)
 その昔青山いたるところにありしとか
 喜寿にして老春というコトバ聞く
 (青春はおぼろ老春を楽しむ)
 母退院見上げる空が青かった
 (退院の母の歩巾へ空青く)
 なま酔に青紫蘇そえて夫待つ
 (夫待つ生酔にそえる青紫蘇)
 信号のみな青となる満ちた朝
 (青信号また青信号とけさの運)
 青写真そこまでという予算
 (荒壁で予算がつきた青写真)
 青い空捨てた古里思わせる
 (空青く捨てた古里なつかしむ)
 青い空うつして釣糸動かない
 (青空を浮べ釣糸動かない)
 青草がのびたと乳牛目を細め
 泡を吹く川が青空食べている
 喜怒哀楽超越してける海の青
 (喜怒哀楽おおらかに呑む海の青)
 バラ色に愛する日待つ青い夢
 青春に悔あり妻もそう思い
 じんましん青味の魚に罪を着せ
 青風の中に若さが生きている
 草笛に青い山脈歩を合せ
 青雲でなし青山なら登れそう
 青山はゆつくり味わい登るもの
 湖の青さが怖い一人旅
 指話続く二人へ青い鳥が舞う

露 杖
 同 貞 祐
 同 日 々 子
 同 英 子
 同 サ ヨ
 同 無 人
 同 幸
 同 利 美
 同 通 風
 同 頼 次
 同 伊 津 志

青い目の中に宿った恋の色
 題一裏一4月20日締切(六月号発表)
 宛先 岡山県倉敷市下津井一九一三四
 千七一一
 本田恵二朗

大阪へ行きたい

堀江芳子

「いずも」の新年会で、小林孤呂二さんと吉岡通児さんが五月の六百号記念大会には、なんとかして大阪へ連れて行ってやろうと云ってくださいます。一度だけでいい、大阪へ行きたい夢はあきらめてはいませんが、こんなからだがときには情けなくなりますが、私気にならないと正朗も可哀そうです。

孤呂二さんは

「おばは、はやこと(早く)、元気になれや(なりなさい)大阪へ通児たちと、おばばを連れて行かたい(行こう)と、話をしようぞ(して)いるぞ。大阪へ、でんこに(出ないで)同人げな顔(らしい顔)しちゃっても(して)いても、さいくにやらんぞ。おじじと(正朗)高野山で芳子がなるようにと拜んじよった(拜んで)いた、姿が、いとしなげで(可哀そうで)、おじじと二人で、まめ(達者)になつて出られえ(れる)ように頑張れや」と、涙を浮かべながら元気づけてくださいました。みな様によくして頂いてありがたいことばかりでございます。

大 萬 川 柳

「机」 入選発表

選者 川村好郎
投句総数 六百五十句
入選 六十句

学友の机に家の差を感じ

川西 洋敏

定年の机の手垢なつかしむ

今治 宵明

一浪の机に母が活けてある

松原 重人

机上論などと先輩とりあげず

倉吉 夕路

恋知った娘の溜息を知る机

大田 軒太楼

食卓も兼ねる机にある温み

鳥取 豊生

六十の手習い机の新しい

松原 サヨ

法廷の机で偽証を許さない

大阪 智子

デラックスな机で捺した旨判

奈良 カズエ

絶筆の原稿机に転ぶべん

熊本 芳仙

欠員の机めぐって散る火花

守口 右近

ひき出しの錠気がかりな子の机

大阪 満津子

雑兵の涙を机知りつくし

八尾 美幸

ちやぶ台も兼用なれどマイホーム

神戸 どんたく

社長の孤独或る日の机知っていた

大阪 真砂

叩いて気がすむなら叩かれよう机

大阪 鎮彦

国会の机は嘘を知りつくす

大阪 貞祐

刑事室罪ない机叩かれる

橋本 木魚

二十歳灰皿も置く机なり

羽曳野 双虎

三浪にやっとな芽が出た文机

和歌山 福水

業績は机上の数字を下廻り

倉敷 春日

一枚の辞令へ机の位置かえる

八尾 弥生

両袖の机に変わり重い印

出雲 夢酔

はったりを利かす机も並べとき

天笑

新入社戦う机あてがわれ

堺 天笑

本店の机へペコペコしに出かけ

兵庫 可住

灯の消えぬ机に明日を賭けている

大阪 弘生

学歴の格差が憎い事務机

堺 憲祐

写経する机汚れた過去がある

西宮 多久志

出世せぬ人やと机も諦める

机無で

子の生長刻み込まれた机撫で

和歌山 光代

論争にはさまれ机無表情

お昼寝の足が机を借りている

あの人の写真を住ませている机

行詰るべんの重さを知る机

大阪 弘生

み

んなの暮しが明るくなる
セキスイのプラスチック



積水化学
本社 大阪市北区茶屋町1

腕サラも汚職も出来ず事務机

嵬 千万子

僕の書類だけが止っている机
土曜日の机うれしいメモがくる

章 敷 素身郎

運だけにたよる惰性の事務机
写経する机雑念とじ込める

背のびする机にママの顔がある

富田林 花 梢

青春の涙いく度知る机

合格の机にえがく次の夢

炎えた日の机に残るイニシャル

八尾 夕花

空席の机へ疑問が積んである

章 敷 里 風

現場から机上論へ来た文句

守 口 笑 風

寝に帰る机一つに窓の星

熊 本 芳 仙

受付の机に花がある笑顔

和歌山 武 雄

出た時のままで机がある帰省

大 阪 文 秋

七転び機の脚はまだたししか

大 阪 一 舟

慶弔の文字にも机無表情

出 雲 夢 醉

内職へ苦学の机と灯を分ち

人 ノ 句 熊 本 芳 仙

居眠っても夜学の机はとがめない

地 ノ 句 大 阪 小 松 園

凡人の誇り机を拭いて去る

天 ノ 句 大 阪 小 松 園

選者 吟

ハイミスの机未決を積んだまま

昭和五十二年度

ベストテン (二月現在)

一 憲 祐

二 花 梢

三 夕 花

四 幽 玄

五 智 子

六 真 砂

七 幸 生

八 幸 生

九 天 笑

一〇 芳 仙

一一 弥 生

一二 美 幸

嵬 憲 祐

一三 君 子

一四 茶 人

一五 静 泉

一六 一本杉

一七 つき子

一八 小 路

一九 美 子

二〇 醉 々

二一 富 子

昭和五十二年第五回

「ほとほり」五句以内

締切 四月二十五日

第六回

「暈」五句以内

締切 五月二十五日

投句先

〒583 堺市堀上緑町一―三―七

藤井一三三万 大萬川柳係

51年度

各地柳壇賞決定

若本多久志選

年間百二十句の佳句から、無記名で選をす
るのですが、第一予選で三十一句いただし、
そこから入選作を決めました。
最後まで残った六句の中から、最優秀句と

秀句五句を発表します。(雅号は本誌が出る
まで私にもわかりません)

最 優 秀 句

能面の裏に烈しき血の通う

秀 句

子の名ほど迷わず孫の名を決める

昂ぶりを静める帯を低くして

新米の味は雀が試食する

嫁ぐ朝父の散歩に添えて出る

早熟で風の匂いを知っている

高橋 夕花

華道関西未生流家元

籠 島 総 甫

教室 西宮市北口町七ノ九

教室 尼崎市武庫庄浅堀

教室 尼崎市武庫之荘三丁目

教室 尼崎市武庫之荘三丁目

教室 武庫之荘文化会

電話 (06) 四三二一四五〇

電話 (06) 四三二一四五〇

電話 (06) 四三二一四五〇

電話 (06) 四三二一四五〇

柳界展望

(原稿締切毎月末)

▼中高生々庵主幹は奥谷弘朗句碑除幕記念川柳大会の柳話を快諾されたのだが、開催日が変更になり、4月29日は先約済みなので止む得ず欠席される。ご長男一彦医師の長男滋郎君は大阪教育大学付属高等学校を今春卒業、大阪大学医学部入学。

▼麻生霞乃先生はその後、元気を徐々にとり戻され、食欲も進み今年は当たり年で「ことしっぽい」とぐろをまいた蛇である」の一句を山川阿茶女史へ送られたとのこと。

▼第10回東洋樹川柳賞は大井正夫氏にきました。(姫路市・日川協事務局長) 贈呈式は5月15日(別掲)

▼時の川柳社創立20周年記念作家賞は「時の川柳社作家賞」水の言葉を噛みしめて賞する酔うている」ほか二作・渡辺沢子」同準作家賞「酒で縫う傷口だから又痛む」ほか二作・片倉沢子

▼賞がききました「昇華賞」一本のマッチ女を遠くする」ほか四作「西村浩」(新

福永清造氏)「今昔時事川柳について」東野大八氏「明治川柳について」尾藤三柳氏」共に今少しの時間がほしかったという声があった。なお新任理事に、山田良行氏(北陸)佐々木鳳石氏(中京)西尾葉氏・岸田万彰氏(近畿)が増員。札幌から長崎までの川柳列島が百余名の出席でおわったことは今後の課題になるであろう。

▼第22回全国川柳作家年鑑の締切日は52年5月31日。参加費は例年、八〇〇円。応募要領は例年と同じ。投稿所〒673明石市松が丘1丁目2番6棟181号正谷柳節使あて。

▼第28回新潟県川柳大会は8日回川上三太郎賞・第3回白川朝太郎賞・表彰5月8日10時から新潟市東大通明治生命ビルで開催。会費各2句。題と選者は「髭喜一」「酒豪」銀雨」「躍る」英福」「沈黙」露光」

▼「歩く」和尾」(川柳手帳) B

人賞」指話燃えて唾もはなやく彩になる」ほか四作「杖田よし昭」

▼川柳宮城野創刊30年記念誌は全国川柳大会の題と選者は「宮」としを」「城」瞭象」「野」岳豊」「これから」良子」「発展」正敏」

「喜び」呑風」「無限」北洋」藤の力」万彩郎」「溢れる」勢火」「紙」重」塊人」「角度」俊平」「春めく」潮風」以上締切4月30日着便。「ゲル」プ」蕙笑」「理める」白雲」「手頃」かし」「顔」真砂己」「舌」水華」つぶやく」民郎」

「異色」清造」「結ぶ」中島生々庵」数える」聡夢」

「這う」東洋樹」(文字)伯峯」以上は6月15日着便。参加費五百円、投句先〒九八〇仙台市東八番一七〇後藤方川柳宮城野誌上全国川柳大会係。

▼第28回新潟県川柳大会は8日回川上三太郎賞・第3回白川朝太郎賞・表彰5月8日10時から新潟市東大通明治生命ビルで開催。会費各2句。題と選者は「髭喜一」「酒豪」銀雨」「躍る」英福」「沈黙」露光」

▼「歩く」和尾」(川柳手帳) B

「雑詠」風柳」講演「川上三太郎を語る」小野為郎」

▼尾藤三柳句会作品集1が川柳公論社から刊行。B6よりやや大きい細長の瀟洒な句集である。作者の寸描筆、これがまた才気横溢、鬼才三柳氏を知る好読物ともなっている。72ページ五

14東京都北区栄町三八二川柳公論社。

▼吉備団子第27集刊行。自選合同句集の元祖として知られ、全国柳人の参加はもろろん本社同人も多く顔をならべている。定価千円、送料37円。岡山市津島東四丁目一八H三二四〇一川柳岡山社発行。

▼川柳さっぽろ2月号「教訓川柳の課題」泉きよしに

▼51年度川柳塔二賞にふれ、生々庵・古方・三三夫氏の評に対し、好意的な寸感を寄せられている。

肉体疲労時の
ビタミンB₁補給に
アリナミンA

☆筋肉痛・肩こり・腰痛・神経痛の緩和にも
☆アリナミンA25ミリ錠のほか5ミリ錠



6判二二四ページ定価五百円。投句の手控えに句会などの賞品に最適。東京都世田谷区三軒茶屋二一九一八、構造社出版株式会社事業部。

で催された。百余名出席、本社関係では牧人、凡九郎、鬼遊、美幸諸氏出席。なお鬼遊氏が席題選者として登壇。(ふあうすと川柳社主催)

▼第7回紋太忌川柳大会は5月29日に変更。詳細次号
▼国鉄川柳人連盟事務局更
▼636奈良県生駒郡三郷町立野三三二、全国川柳人連盟事務局、古川一高方。

▼柳樹寺川柳会川柳人編集所住所変更
▼354富士見市鶴馬二六二二三、山三マンション二〇三三、三室天翠。

▽同人の動向△

▼小西無鬼氏(兵庫県)神戸新聞へ川柳さきやまゲループの活動状況を執筆、ご健康をとり戻しつつあるとのこと、三月の本社句会にも顔を見せてくださった。
▼橘高薫風氏(豊中市)は俳誌「青玄」二月号に伊丹三樹彦主幹の五句へ華麗にして適確なる批評のペンを執られた。なお三月三日は西尾菜氏と和歌山七面句会へ招待され、今や人気選者として大忙である。

▼山内静水氏(竹原市)から「故季贅氏の句集などで

精力的に走り回っていらすと。

▼戸田古方氏(豊中市)は二月下旬退院され、故戸倉普天氏の遺句集刊行のため一三夫氏宅を訪問するほど元気になるられた。

▼若柳潮花氏(高槻市)は2月11日に自宅廊下ですべり、そのため左足を骨折、肉ばなれを起こし北摂病院へ入院。その後、潮花氏から三十針ほどぬったとお便りをいただいたが試歩の日も近いとか。一日も早く退院されるよう祈ります。

▼堀江芳子さん(島根県)から「二月第一火曜日10時30分からのNHKテレビで直原玉青先生の水墨画の指導がありまして、始めて美しい表紙絵の玉青先生に接しました。」電波新聞へ「三夫先生ご執筆の『若い人のことば』と『夫婦漫才』を薫風先生から送っていただきました。『漫才台本』もあわせて正朗に読んでやりましたら大喜びでした。

▽旅 信△

▼大矢十郎氏(新宮市)から「マニラに来ています。内地の雪が嘘のようです。奉文の紫へ言葉のない折り」

▼越智一水氏(今治市)から「第10回郵川連四プロ大会・阿波池田保養センターへの寄せ書き拝受。残雪へ小川は春の音を立て」

▽四月の句会△

▼菜の花句会は10日午後6時から西郷会館(八尾神社境内)近鉄大阪線八尾下車南歩一分。会費三百円。題「そろばん・星・テレビ・寝る」席題二題各五句以内。投句は郵券百円同封。

▼581八尾市高安町北一丁目二五、大路美幸あて。
▼南大阪川柳会は20日午後6時から松崎町大萬で開催。題「観念・シンクス・欠ける・辻」。

▼川柳東大阪句会は23日午後6時から東大阪市立中央公民館二階第二集會室で開催。題「新学期・祝酒・決め手・リード」席題二題。投句先〒577-2中大阪市下小阪七の十一、竹中肖二宛(郵券50円三枚同封)。

▼堺川柳会は12日午後6時から摩太郎居で「題は「浮く・アベック・眼」の住居番号を一四五一の一」と訂正。(同人名簿から)

ショッピング・ゾーン

梅田
一番地

楽しいショッピングとくらしにくらするのこいをつくるの皆さまの百貨店で

大阪梅田・水端定休
阪神
電話(06)345-1201(代)

久米田寺さくら合同句会

日時 4月17日(日) 午前11時 開会
場所 久米田寺 (阪和線久米田駅下車徒歩15分)
会費 700円
中食 各自持参
締切 午後1時 席題なし (各題3句)
兼題 「岸」高橋 幸代 岸和田川柳会
「港」野坂つき子 堺 川柳会
「花」宮西 弥生 菜の花句会
「東」竹中 綾女 東大阪市川柳同好会
「富」岩田 美代 富 柳 会
「南」宮尾あいき 南大阪川柳会
「歌」垂井千寿子 川柳和歌山
(アイウエオ順)

本社三月句会

会場 金属会館
七日 午後六時

スペースがないので、せっかくの多久志氏の柳話が書き尽くせず深謝。51年度の選句から間違いやすい文字などをプリントにして配り、出句する時は辞書で正確か、どうかをもう一度、文字を調べてほしいと述べられた。意味の通じない句のあることは事実で、あたら佳句を没にするのは選者としては辛いこととおう。

三月の月間賞杯は本多柳志氏に輝く。

(進行) 柳宏子 | 記録・鬼遊 | 整理・庸佑

出席 滋雀・雅風・与呂志・道夫・与史・太茂津・幸・右近・漫柳・維久子・儀一・勝美・眉水・花梢・美代・肖二・綾女・無鬼・柳志・水客・紫香・あいき・一舟・無鬼・飄太・蘭・千万子・文秋・君子・飛鳥・柳宏子・幸生・一二三・牧人・喜風・恒明・吸江・一三天・三十四・幸太郎・寿美子・鬼遊・千梢・天笑・一念・野生・博泉・美幸・凡九郎・史好・酔々・多久志・好郎・べ女・栄・庸佑・弥生・形水・度・岳人・頂留子・薰風・小松園・敏・葉子。

席題「標準」

内海 幸生選

標準に迫る努力をこうてくれ 庸佑
標準体重色々超えて楽天家 寿美子
国訛り標準語の策に負け 千万子
標準のサイズへ自分を閉じ込める 幸
有って無い標準価格にある怒り 右近
目の前にある標準の的外す 肖二
標準を超えたと誕生の電話口 雅風
どう甘く見ても標準以上の僕 飛鳥
標準のサラリー三DKに根を生やす 夕花
ふる里へ帰ると消える標準語 夕花
標準は標準私らしきでくらしまず 凡九郎
止り木に立つと消える標準語 弥生
許されぬ愛に標準などはない 幸
一応という標準の線を引く 柳宏子
僕なりに決めた標準もっている 柳宏子
標準語喋り香具師にみくびられ 儀一
富者も貧者もならして標準預金高 度
標準のくらしになって出る気まま 博泉
標準を決めてセールス励まされ 庸佑
標準語身につき故郷に遠くいる 花梢
旅に出て標準語聞く味気なき 吸江
子と五人標準家庭の柳に暮れ 滋雀
標準の思想でぬるま湯につかてる 夕花
標準のくらしに飽きて来た男 漫柳
騒ぐ血も持たず標準型で生き 一三天
標準の頭はかりで彩がない 美代
標準価格などと庶民はごまかされ 文秋
標準の原点自分におく男 凡九郎
春斗を標準にして動きたず 一
標準の生活に驕る隙がある 滋雀

標準の色で群集にとけてくる 度
四捨五入して標準型にされ 酔々
標準にしておく世間孫がある 雀踊子
標準を下げて才媛売れ残り 静馬
標準の言葉へ謀叛せまられる 凡九郎
標準に育っているのにまだ不満 吸江
標準の一家で悩み少しある 酔々
十二時に皆んなど同じめしを食う 鬼遊
雪国の九官鳥は標準語 岳人
どん底を標準にして笑ってる 度
標準を追う目が寄付帳練っている 幸生

席題「水色」

竹中 肖二選

市長さんの夢水色の空があり 柳志
サファイアの水色深き愛を秘め 牧人
フッシュヨンに水色まとうニューモッド いわを
水色の淡い和菓子に茶を立てる 一念
水色のテープで新婚船出する 頂留子
無色ではないヨと水色言いたそう 凡九郎

四月新学期会員募集

毎週水曜日・月四回
夜6時30分〜8時30分
六カ月で初等科修了

大阪市南区大宝寺仲之町一丁目
警得寺内

関西奇術教室

電話四七一二八

水色のドレスを着てたスリだった
空は水色シャンペンを抜く音もよし
貸ボート塗る水色も春を呼ぶ
水色のワルツに初恋すべり出す
水色の女で胸の炎は燃えぬ
過去たたむ女に水色着せたい
水色の空を二つに飛行雲
水色を好む女ですぐ妥協
白鳥も水色に溶けお堀端
水色の封書でつれない返事来る
水色の滝は墨絵の中で落ち
水色を好む女でまだ嫁かず
水色の宿の浴衣でついで浮かれ
雛の客水色リボンをつけて来る
水いろのリボン少女の日の目さめ
水色に塗るかえられぬ黒い過去
水色にうつす心に悪はない
影に立つ女のイメージは水色で
水色のドレスへもつれて来た歩巾
水色のドレスへもつれて来た歩巾
水色に透ける恋がいじらしい
水色の服麗人によくうつり
水色の花瓶に映える赤いバラ
水色に変わり舞台は夏になり
水色のワルツを踊るアメンボウ
水色のカーテンクールな夏にする
水色に滲んで淡い恋心
肖二

寿美子
滋雀
柳宏子
牧人
弥生
庸佑
眉水
喜風
右近
岳人
吸江
与史
勝美
花梢
幸
三十四
弥生
喜風
維久子
一三夫
儀一
綾女
紫香
度
君子
肖二

兼題「慣れ」
板尾 岳人選

住み慣れた我が家に勝る城はない
嘘に慣れまことに拗ねておちてゆく
登美也

銀談に慣れて真赤に口をぬり
看護婦の馴れた手付が冷めた過ぎ
慣れだけをレールにのせている不安
慣れているからミニスカートかて似合い
三つ指の家風に慣れた嫁の知恵
信号を犬も慣れてか青を行く
運転の慣れが油断に加速する
登り道慣れた足どり土ふまず
男もうなれた手つきで米をとぎ
洗濯機使い慣れてる男です
新しい椅子にも慣れている欠伸
絶好のチャンスに慣れた髭である
北を指す磁石に慣れを見て了う
脇役に慣れて主張を持つ男
あきらめに慣れてこよみへ斜線引く
さまざまに慣れて男の顔つくる
腕ぐことに慣れて男が馬鹿に見え
何もかも一枚上の妻に慣れ
温室に慣れ人形の息をする
春雨が傘に慣れてる絹の音
犬放つくさりの長さだけ走る
ピントはずれの吊り草に慣れている
貧しさに慣れた背中丸くなる
慣れすぎて小さい石にもけつまずき
新婚も何時しか慣れた塩加減
幸福に慣れた夫婦にある訣れ
ラッシュにも慣れて上手に揺れている
かけひきに慣れぬ男の電算機
錠剤の軽さに慣れて船という
真実の見分けに迷う嘘に慣れ
オーデコロンふつて罪には慣れている

柳信
義夫
古方
祥月
栄
夢
三和
花梢
維久子
野生
美代
水客
としよ
幸
維久子
肖二
雀踊子
夕花
美代
度
千梢
美幸
千梢
鬼遊
美幸
博泉
肖二
水客
太茂津
美代

大阪の水にも慣れておいでやす
満たされぬ福祉に慣れて作業服
慣れた手のタイムカードにある悲哀
慣れてきた夫婦に核が燃えはじめ
貧乏は妻の方から慣れてくれ
野生

若鮎川柳会創立五十周年
祝賀川柳大会

日時 昭和五十二年四月二十九日
午前十一時開場

場所 下市「弥助」奈良県下市町本町
近鉄吉野線下市駅下車歩十三分
奈良発バス本町停留所下車スグ

兼題
「箸」 選者 博多 成光
「弾む」 選者 伊藤 静夢
「染める」 選者 岸田 彦彩郎
「天」 選者 河合 渡口
「鮎」 選者 中島 生々庵
「足跡」 選者 福永 清造
「各題三句以内」 投句切零時三十分
「各題 秀句 呈賞」
席題なし
お話「義経千本桜」について
当代 宅田 弥助氏
左記へ
● 欠席投句の方は三〇〇円(切手)封入
● 御出席下さいます方は準備の都合上出
欠を四月十五日迄左記へ申込み下さい
(奈良眞生吉野郡下市町北口 堤暉代志宛)
会費 金二、〇〇〇円(昼食・記念誌・
祝盃・発表記)

主催 若鮎川柳会

嘘の世に慣れ真実は見失わず
 失恋に慣れてますのと笑みを見せ
 妻の笛に飼ひ慣らされた蜂となり
 露路裏のあつい情に住み慣れる
 もうなれていきますと愚痴のない女
 慣れですと名人芸を高ぶらず
 慣れてきた自信の背に隙がみえ
 倅せに慣れてぶくぶく太り出す
 戸を叩く風にも慣れて独り住む
 水槽に慣れて金魚昼寝する
 慣れた手と知ってか縋索直なり
 生活に慣れて句読点打ち忘れ
 慣れ夫婦遠い雪崩れを聞いている
 朝食を抜く慣れとなる夜行性
 伝統に慣れた男の数え歌
 旅慣れて靴の中も軽くなり
 悲喜劇に慣れた花輪の自尊心

兼題「潜む」

香川 酔々選

老いらくへ煩惱の虫まだ潜み
 世話ずきの裏に潜める優越感
 陋巷に潜んで賢人時を待つ
 絶ち切れぬ炎が潜む尼の胸
 腕力に自信が潜む顔で生き
 さりながら潜めるままで生きつけ
 便利さの裏に潜んでいる悪魔
 土潜を爆発させた下戸の酒
 土踏まず挑戦状を潜ませる
 傷心が潜むと海が碧く見え
 鳩尾のあたりに潜む謀反心
 口惜しさを紫煙の中に潜ませる

滋 雀
 天 笑
 牧 人
 滋 雀
 花 梢
 右 近
 天 笑
 牧 人
 女 人
 寿 美子
 右 近
 一 三夫
 美 幸
 弘 生
 幸 幸
 弘 生
 幸 幸
 吸 江

喝采の心に潜む由起夫の血
 便箋に春の心を潜ませる
 一と言の中に別れを潜ませる
 夕べのしこりが潜んでる朝のパン
 雪ダルマ乳房に潜む企みか
 乾盃の笑顔に潜む果し状
 二月堂汲み出す水に潜む春
 その善意潜む不安の中で受け
 石屋根に潜む越後の春を待つ
 或日ふと心に潜む鬼を見た
 近寄るな喜寿でもおひらまだ男
 あの夜の酒に潜んでいた鎖
 泣き声の中に本音を潜ませる
 一枚の名刺に仕掛けが潜んでいる
 古事記には日本人の血が潜む
 三代目まだ仁侠の血が潜み
 政治への不満も潜む市場籠
 逆境に潜んでる鬼動きだす
 生甲斐をタンスに潜めている女
 鳴りを潜めて男は明日を考える
 伯楽に潜む力を見出され
 少年の心におとこがもう潜む
 ゴキブリも潜んだままを運ばれる
 花活ける指に魔性を潜ませる
 能面の哀しみだけは見つめよう
 罪深く潜むとふとん重くなり
 上海の灯を見て還る密航者

兼題「丹念」

西田柳宏子選

丹念に哀史を織って雪深い
 丹念に新車のうちはよく磨き

幸 生
 美 代
 一 念
 千 万子
 岳 人
 夕 花
 度 度
 多 久志
 大 茂津
 瓢 太
 一 舟
 幸 幸
 千 万子
 牧 人
 一 三夫
 多 久志
 柳 志

丹念に白髪一本描いてあり
 丹念に聞いただけ聞いて忘れてる
 丹念さだけが取柄というてくれ
 丹念に包んだ土産の小さいこと
 丹念に教えてもろた道違え
 丹念に化粧してゆく別れの日
 丹念に老母の手紙はひらかなで
 丹念に千羽二千羽折った鶴
 丹念なメモでポイント聞き洩らす
 葉包紙丹念に折る千羽鶴

時 川柳社二十周年記念 川柳大会
 第十回東洋樹川柳賞贈呈
 日時 5月15日・11時開場・13時締切
 会場 兵庫県民会館・11階特別会議室・神戸市生田区下山手通四丁目五七
 国鉄元町駅北

兼題

「髪」 (当日発表)

「急所」 小松原介 選
 「燃える」 高杉 鬼選
 「皿」 橋本 白選
 「舌」 去来川巨城 選
 「濁る」 延永 忠美選
 「花束」 平賀 紅寿選
 三条東洋樹 選
 ・各題二句、欠席投句受付けず
 ・席題なし
 お話 「東洋樹さんと私」 大井 正夫
 会費 千円(呈記念品・発表誌)
 賞 知事賞・市長賞外多数
 主催 時 川柳社

丹念に女は化ける夜の蝶
丹念な言葉皮肉に受取られ
儀 蘭 一

聞く方がソッポ向くほど念を入れ
丹念に新聞読んで失業中
一二三

丹念に能面を彫りもの足りず
丹念に税吏赤字を黒にする
静馬

丹念に履歴書書いて夢を見る
善人は丹念すぎだつてつまずき
与呂史

丹念に今日を稼いだ汗を拭く
丹念に仕上げに職に誇りもつ
野生

丹念に人の嗜着を縫うている
丹念に土蜘蛛の顔出来上がり
鬼遊

丹念に机を拭いて出る定年
丹念に丹念に紙折る精薄児
一三夫

丹念に観ると羅漢に俺が居る
丹念に塗ってピエロの顔つくる
酔々

丹念に返杯をして酔うていず
丹念に書いても癖が抜け切れず
水客

丹念に父は余生の地図を誂む
丹念に言葉へ裏が透けている
凡九郎

丹念に写経の筆は洗われる
丹念に夜の指紋消している
雀踊子

丹念に磨くと寒いがガラス窓
丹念に墨すり距離を置いては
道夫

丹念に育てた花は裏切らず
丹念に屈きすぎて貴方が死んでいる
水客

丹念にラッキョをむいている期待
丹念に倅せ 綱む 指洗う
凡九郎
美代
水客
柳宏子

兼題「砂漠」 正本水客選

都市砂漠隣の人の死も知らず
都市砂漠枯葉は土へ還られず
一栄

都市砂漠サボテンまねて武装する
達観の顔で砂漠を行く駱駝
弘生

砂漠へもロマンの星はちりばめる
砂漠でないので駱駝かたげれる
夢酔

部族の血守る砂漠にある掟
忘れぬ愛は砂漠へ埋めて来る
雀踊子

陽炎の向うに揺れるピラミッド
メルヘンの砂漠に暗いかげがない
肖二

さぼてんへ夕陽砂漠が起きてくる
脱落が怖いサバクへ呼びつづけ
静馬

東京の砂漠で王子さまたいくつし
砂漠からオイルショックも吹き出して
千方子

やきつくす色でサバクに陽が落ちる
また次の砂漠へ移る辞令出る
千久志

砂漠いま月がとまって風はなし
砂漠に生きたかげ風を知っている
天笑

砂漠行く広さを雨に追い越され
去年今年まだ砂漠から抜けられず
紫香

満目百里虹を信じている砂漠
無言の妻と今宵砂漠の中にいる
柳志

ドイツの妻と今宵砂漠の中にいる
デイにも蒸溜水の星が降る
二三

砂漠にも蒸溜水の星が降る
サヨナラを砂漠に書くのと負けになる
酔々

月が出て砂漠は死んだ色になる
砂漠無情今日の足跡さえも消し
としよ

デザイナーの目には砂漠にある起伏
しずかに別れ心に砂漠抱いている
美幸

水客

柳志

右近

一三天

水客

いずも川柳会

創立50周年記念川柳大会

日時 昭和52年6月12日(日)午前10時

会場 出雲市体育館(出雲市駅より約一

会場)出雲市役所東約三〇〇米。

講演 川柳塔社主幹 中島生々庵氏

兼題

力 川柳塔社副理事長 西尾 栗氏選

粒(つぶ) ふあす社川柳社 田中好啓氏選

半分 川柳岡山社 西山茶花氏選

長い 鳥取県代表 河村日満氏選

対話 高根県川柳協会長 柴田午朗氏選

出雲本 会 尼 緑之助選

席題 三題予定 ◎各題二句

出句一切兼題:11時、席題:12時30分

会費 一、〇〇〇円(中食・記念品・記

念誌等贈呈)

懇親宴 (希望者) 会費 一、二〇〇円

進行予定 大会終了:16時、懇親宴:16

時10分〜17時

主催 いずも川柳会

後援 出雲市高松町

TEL 〇八五三〇四六九八

欠席投句参加は 出雲市教育委員会

◎各題別紙、住所・氏名と二句連記。用

紙は半紙四ツ切り大

◎参加料 五〇〇円

◎投句先 〇六月五日 出雲市大津町朝倉

◎連絡 出欠・宿泊等について事前に

御一報頂いたらよろこびます

「北壁の男らしさを観て飽かず」 (建立地変更)

奥谷弘朗句碑除幕式記念句会

昭和五二年四月二十九日午前十時から



建立地 鳥取県西伯郡大山町菅大山レック
トハウス (無料休憩所) 敷地内

建立時期 昭和52年4月29日 (祝日)

奥谷弘朗句碑建立発起人

倉吉市長 小谷善高
倉吉市議会議長 大橋二郎
倉吉市教育長 福井寛
川柳塔社主幹 中西生々庵
川柳塔社副主幹 河尾栞
県会議員 山崎雄
市会議員 山口義雄
市会議員 山本壽雄
倉吉市議員 伊藤雄
倉吉市議員 西谷日満
西谷測量KK社長 河村日満
川柳塔社同人代表 兼柳話

日本海新聞柳壇選者 小林由多香
大山番傘川柳会々々長 澤車榮
友人代表表 河島薫
現代俳画協会理事 岡本睦緒
倉吉打吹川柳会 今村夕路
(実行委員) 渡辺独歩・伊藤勇峰・○日置文
郷・加藤貞山・清水一保・森田布堂・但見
石花葉・増田竹馬・石垣花子・八木千代・
林瑞枝・川崎秋女・林露枝・河島律子・河
川洋々・伊藤すえの・田民碧穂・高野伊之
蔵・○禾木進・○日野久・○池本登・○河
口信幸・○高村友明・○酒本滋行・小西雄
々・松本杏人・○小田真弓 (○印は菅林署
関係役員)

会場 鳥取県西伯郡大山町大山寺
大山観光会館大ホール
両川洋々・渡辺独歩
柳話 堀口堯人
兼題 (各題共に三句以内)
「大山」大阪 西尾 葵選

「還暦」出雲 尼緑之助選
「定年後」京都 加賀破竹選
「口癖」西宮 若本多久志選
「無欲」岡山 大森風来子選
「自信」米子 沢車榮選
「縁起」島根 藤井明朗選
特別題「交通安全」共選 橘高薫風選
締切 午後1時30分 (出句は出席者に限
ります。席題なし)
呈賞 各題秀句に倉吉市長色紙
特別題に毎日新聞社杯
会費 一千元 (昼食・記念句集代)
祝賀会 会費二千元程度のパーティを計画
主催 倉吉打吹川柳会
協賛 鳥取県川柳作家協会
連絡先 倉吉市下田中五二八の六
倉吉打吹川柳会
(電話倉吉三二一六七)

老地柳壇

▼かならず原稿用紙にペン書きで文字は楷書。締切毎月末着便まで。21行以内。十七字以内の句に、下三マスに雅号。

オースケイ川柳会 大坂形水報

選曆を迎えた父に白髪増え
結局は結論でない長話
契約の寸前白紙に戻された
ワンカップ蓋取る先に喉が鳴き
落し蓋してもゆで海老曲つてた
蓋のないなべの煮物に冬の味
長い列出来ればならんでみたくなる
親よりもりっぱに見える長い影
お迎えに行ったらお客が先に来る
凍てた駅通る人が見つからず
奉賀帳一番筆の重い事
律義きは白紙に包んだお賽銭
NHK迎えて町が大きわき
嫌な事続き白紙のまま日記
落書きをするにはきれいな紙
一枚の白紙の重み噛みしめる
北方泥土春を迎えるすぎがない
おふくろの味に煮つめる落し蓋
蓋とつてみれば何でもない料理

川柳しんぐろ 大輪報

そのうちの言葉の中にある不義理
ボヤ出してそれから近所へ低い腰
留守中の火事へソクリが灰となり
もう消えた火事場に残り火をかこみ
野次馬が小火を大きな火にする
そのうちにはわかる和解の時を待つ
そのうちを重ねて遠い人となる
そのうちの一人本心喋らない
伝説の蛇に神秘な森がある
舌出して蛇が挨拶する賀状
気がかりな場所で止った聴診器
止めるものないのと知ってから死ぬ
聞きづらな話を止める咳げらい
火災保険ことわった晩火事にあい
保険屋が勧誘に来る遠い火事
おもちゃでも蛇は尻尾をつかまれる
そのうちに伺いますとそれっきり
消防のサイレン有難く聞く寒夜
ボヤですみ一寸ふくれた消防車
むらかも川柳会(鳥根県) 藤井明朗報

雪化粧は女かも知れぬ
ひっそりと揃って長生きしたい欲
孫去んで庭に残った雪だるま
夕日抱く海へ名残りの波の彩
燃えつくす情炎となる雪あかり
白銀の山が呼んでいる若者
深い雪森は静かに春を待ち
拍手がこだまで帰る宮の森
白い髭撫でてうなづく初鏡
長生きの家三代で渡り始め

雀踊子
千寿子
溪水
よしほ
祥月
まさ子
大輪
寿子
功
幸
十郎
富子
平蔵
実城
福水
喜一
操
弘生
武雄
孝華
白汀
雪華
英子
蚊雪
蜂雪

長生きの共に苦楽の水を飲む
雪を得てひときわ芽える寒椿
長生きをしてねと孫に囲まれて
カモメ来て海は大漁にわく港
健康な声こたまして森の中
荒海にどんと乗り出す心意気
古稀過ぎて米寿へつづく線を引く
奥深き森そのままに神宿る
どんぐり川柳会 谷垣史好報
初恋をポカンと割ればガラス玉
出直しの女は人形も持たず
冷暖房硝子は堪えることを知る
京の庭善女に変身してかえる
ガラス器から一つこぼれた金平糖
紙ヒコキ降りる小さな庭が好き
貧しさを救う一輪庭に咲き
庭いじり母を真似する年になり
庭づたい操を護る足袋はだし
語りかけてるようにもとれる石の庭
箱庭の写真と知らず松をほめ
ガラス戸をガラッと開けて来た福音
見えすいたおだてはうちも身構える
野良犬の掟庭へは入らない
ポッパンはブーツの女にも似合う
硝子越したた見るだけのニューモード
二次会へおだてた方が銭を出し
町工場の硝子こわれたまま二月
南大阪川柳会 中川滋報
へそくりの買物だから着そびれる
サンタクロースになる買物をして帰り
まっすぐな竹にも詰まる節を抱く

一 郎
ゆき子
雪路
幸子
信夫
和幸
祥月
明朗
美幸
弥生
いわを
恵美子
ゆきを
酔々
鬼遊
真砂
小松園
瓢太
儀一
鎮彦
喜風
岳人
薫風
吸江
万里
史好
久子
智子
君子

妥協した管の話が行き詰り

良心がやっぱりあった詰まりよう

へそくりのリストも見せる母の老い

呉れそうな寄付のリストを持ち歩く

リストまで作って儲けを知らぬ株

金づるのリストマダムの覚え書き

晩秋へ木の葉が落ちる葬送譜

魂の叫び譜となる津軽三味

人生の上り下りが音譜に似

人生譜日本人と雪月花

なげなしの知識に足をすくわれる

大卒の知識があつて職がない

しゃべるから知識の浅い事が知れ

いつもしむかいでと居職ひやかされ

セールスに外の天気を知る居職

生涯を居職に賭けて居るひとみ

川柳塔まつえ句会

も真似にこり真打の道遠し

ころぶよに笑い声きくあかり窓

旧姓は抜殻となり嫁太る

酔うた父真似て子供が笑わせる

陽笛地獄と知らず鴨は寄る

ライバルに転んだ不覚追い越され

物真似にやはり世間は狭いもの
旧姓は正田美智子と子に教え
真似できぬ芸へ妓は座り変え
真似させるつもりは辭でないもの
真似してくれる亡夫の不倖せ
真似て真似て師匠を超える心意氣
誕生の児ががっちりとかかむ金

好一

凡九郎

喜風

眉高

雅風

柳志

蘭

肖二

綾女

鎮彦

預留子

とし子

文秋

滋雀

あいき

弘生

儀一

月報

虎秋

みつこ

敏雄

登美也

巡歩

舞吉
雪美
鶴丸
孤呂二
通兒
町紅
晃男
祥月

川柳東大阪

駅前はもう故郷でない匂い

駅前で方向音痴が呼ぶ車

駅前での自転車を蹴る酔っぱらい

駅前で光る補導の瞳に出合い

駅前に住んで団地の良さ思い

売りに買わない駅前土地価格

屋台押して駅前店舗の夢を持つ

駅前の子の巻き添えになる家族

叛逆の子の巻き添えになる家族

洗濯機まわる家族がもつれ合い

家族麻雀なめてた妻にしてやられ

家族から見れば父さん偉い人

作句いま心の支えとなる余生

出稼を支える妻の文をとぎ

年金を支えてくれる暮し向き

下積みの提案社長の目の動き

乗り気です妾は二十七日のもの

一票を乗り気になれぬまま入れる

コースの下見脱線もする予定

いずも川柳会

太陽の合図で四季の花開く

妻を呼ぶ合図拍手二つ打ち

結ばれて誓った筈がもう別れ
結束を誓う血判ためらわず
腕さきと言われ一癖もって老い
包丁をまかせ確かな腕になり
凄腕と呼ばれまあるい線を持ち
生きる女ひとりにかえる夜が寒い
平均点だったわが子をほめてやり

竹中肖二報

美子

雀踊子

綾女

鎮彦

柳信

右近

あいき

喜風

千代子

儀一

度一

誓二

好一

一栄

雅風

肖二

水京

三十四

凡九郎

文秋

草丘報

孤呂二

鐘堂
湖楽
さみえ
芳子
白汀
耕草
晃男
ひさお

要点になかなか遠い話下手

点と線見玉小佐野の触れ工合

通勤車女の腕に刺り込まれ

一点を見詰めて唄う安来節

名工の腕には年を取らせない

点線ぐ奴の露骨さ目に余り

穴道湖が見える合図の汽笛鳴る

自転車のベルを合図に帰って来

点と線虹に結んで果しなく

川柳後楽 (岡山市) 井上柳五郎報

撒いた豆食べられるかと祖母ぼそり

豆まきへ鬼がひよっこり帰って来

豆まきに親は耐えてる肩車

豆まいた福を温めて春を待つ

初詣信心もなくただつづき

ことしまだつづく不況へ身構える

栄光につづく試験に堪えている

良くつづくどにいばらの過去があり

この道につづく桃源境があり

高台は下町とは異う風が吹き

高台に汗を知らない人が住み

高台に帰りにブーツの足をなで

高台へ今日も新聞昼にコンパクト

本性をさきいかくす生地でゆく
コンパクトもいらぬなり生地でゆく
顔の方向けて女房のコンパクト
コンパクト四角い顔が丸くなり
葉の花句会 高杉鬼遊報

休二郎

通児

虎秋

夢酔

正朗

独仙

草丘

可保留

緑之助

めぐみ

昌吾

照路

恒洋

正道

柳五郎

佐加恵

たけ志

久米雄

梁太

胡風

博友

幽彦

夏彦

定平
鮫虎狼
ひろし
鎮彦
秋美

正面にすわった足がしびれ出し
雪景色鴉をきれるいな物にみせ
寝乱れのままで帰った雪女郎
勘定の高さよマツチ三つとる
取り越しとわかり熱燗追加する
細雪別れ言葉が温かい
ふるさとの山なら登る足であり
バーゲンへついで釣込まれている追加
人妻の素足に不倫が少しある
銀行のマツチに書いてある嫌味
落椿雪の白さで眠ります
真相をマツチに聞いてる二日酔
ぼたん雪女の嘘を積んでゆく
追加する毛糸の色がちと違い
新しい傘雪の日におろす
華やかな恋に音楽利用され
川柳わかやま

津田与史報

雀踊子 あいき 肖二 史業 幸生 頂留子 牧羊人 洋子 雅風 美幸 岳人 君柳 漫花 夕儀 智子 綾女 公子 弘生 和子 恒治 道夫 福水 英子 佐知子 裕美 光武 代雄

ワンマンの髭が仮面を喰ってる
ワンマンと言われる社長の孤独感
片言の孫にワンマン消えている
大空にワンマン図描く渡り鳥
ワンマンも覗くとしようもない男
ワンマンに素直な妻がかじを取る
びったりと二番にがついているゆとり
川柳大阪 児島与呂志報

食欲へ勿体なくも瘦せたはり
北からの便りとししやきの味が着き
良く聞けば何の文句もない夫婦
食欲のままに若さは伸び太り
汚れのも働け肌は光ってる
黒いのが優勢になる肌の色
食欲へ働く者の明日がある
双肌を見せて女房のサロンパス
ふるりの味覚へ食欲そえられる
しやわせは肌につたわる紅葉の手
旅にきて吾が家の味を恋しがり
洋食のマナー食欲すりへくし
きき酒に舌で転ばす味のこく
花道をとばとば泣かす名子役
天使の食欲に乳房豊なり
よく文句いうて孤独になつてゆき
重文になつても仁王笑わない
倅せな指へ宝石よくなじみ
愛もろし日々を防いでいる女
川柳たけはら 森井善居報

としよ 喜晉司 功彦 善智子 祥月 正博 胡蝶 洛醉 楽々 雅果 弘生 喜醉 本蔭棒 武松 漁人 徳松 京介 秀枝 君人 重水 眉水 敏子 道子 与呂志 静水 松緑 鬼焼

回り道これも人生はしご酒
キリギリス露に無情の遺書を書く
肩の荷を下ろして聞ける除夜の鐘
迷いからさめると山が低く見え
ロマンスのありて初日の燃えさかる
ふるさとは初日に映えるつらら花
夜冴えて墨の匂いにひとりきり
夜泣きする子を温めて二時を聞く
変人といわれボツンとそうかもね
みにくい作品よわが自画像か
よく我慢しましたなあと函を抜かれ
バイブルの手垢と別にもつ仮面
恋占い当たっているから気にかかり
反逆児川の流れが許せない
ソロバンは四級十才すばらしい
そのころの私に似てる子を叱り

夕暮れて古都は弥陀の瞳に沈む
石仏の笑顔は四季を云わず立ち
子の夢がたのしく伸びる二重丸
終着駅で月をめあくて宿さが
おっぱいの愛は知らない哺乳びん
首横に振るより能のない振り子
罪深いかたちにするめ焼きあがり
反省が欲しい男のヘルメット
天皇の余暇に顕微鏡のある平和
俺に似る片意地をなぜ叱られる

花炎 紫光 房幸 蘭狐 白史 篤晴 文子 笑舟 寛子 鈍己 政朽 不代 千美 善居 愛そのみ

佳句地10選 (前月号から)

松川杜的選

美代 博友 夕路 和友 かつ子 幸太郎 小松園 ますえ 栗鬼 遊

かえらない若さに笛ふいてみる
生命線くつきりまだまだ大丈夫

城北川柳会

川口弘生報

春風は母の墓石なでていき

一人住み風唸る夜の悲しきよ

風に乗る風気持よく空に舞い

梅林の風のためを待ちかねる

歪んでる心が立てた小さい風

船出する吾子へ満帆の風よ吹け

目標のない少年風をきる

風の音ふるさとの夢はこんで来

予告なしのお客に母の智恵を借り

予告した招待状が高くつき

不賛成母はやんわり予告する

婦人デー世界の女傑息が合い

健全な婦人が持つてる悉無律

表彰の婦人の内助褒めてくれ

婦人会長引受け妻が遠くいる

共稼ぎ婦れば家事がのしかり

川柳ささやま

河原みのる報

蛇の目傘京都の雨にしてくれる

蛇蛙どちらも助けてやりたいな

とぐる巻くカス場の隅にある温み

ひそと住む女の庭を蛇が抜け

親切な小貸しの蔭で爪を磨き

野心家の裏で野心家を繰り

保険屋の靴につめてある野心

善人を鬼にも蛇にもした世相

マッチすれば燃えつきさうな胸のうち

燃えつきた様にサルピヤ立ち枯れる

燃えるだけでも静かな尼の笑み

かつ子

一路

恒治

つね

妍斉

秀村

弘生

満津子

道子

喜代子

ますえ

星斗

恵美子

弘一

三十四

右近

千代

可住

和人

与志

文平

みのる

越山

秀峰

近江

珠玉

つや子

喜美代

民宿で手織着る娘に心澄む
民宿に来てふるさとを取り戻し

大百科半分飾りの役つとめ

お飾りにブルドーザーもおとなしく

仏壇へ雑煮の味をみて供え

三宝の広さに困る飾り餅

雪国の正月出稼ぎ居る不況

孫を抱く幸しみじみと初詣

お開きも云えぬ年始が腰を据え

三カ日日本の姿少し見る

朝陽朝酒腹の立たない新春三日

北風が床屋掃りの衿を刺す

北風へガスの元栓しかと閉め

北風に裾を押えて利久下駄

北風を袂で受けて風呂掃り

北風はサッシにせよと夜を吹き

北風へ今日も来て焼く太鼓まん

素人に負けたと思う日の夕餉

素人と見えぬ化粧で疑がわれ

愛情の欠けら指輪を貰うてやる

おいと云う名で一生を終りそう

十二月多弁な女を街で避け

急いで月の呼びとめて無駄話

倉吉打吹川柳会

奥谷弘朗報

毎日が口癖となる物価高

口癖の公約選挙が済めば消え

始まった母の口癖にふたをする

口ぐせの説教耳にたこが出来

母さんの口癖背にする出勤時

幼子の口ぐせ親といきうつし

百合子

まどか

老萩

宗珠

初美

福恵

繁男

たかし

一二三

蛸蛇

海州

久子

陶水

久野

菊江

秋野

とみ子

寛子

あつ子

恭一

窓花

松風

芽十

夕路

独歩

千重子

きくの

胡蝶

たつえ

▼水粉千翁編集「川柳道場」—250—から
川柳道場會員、中国五県活動作「作品合同互
選会」—課題「色」—。選者—青竜刀・風柳
・弓削平・寛哉・久米雄・好郎・聡夢・薫風
・菜・生々庵・俊平・恵二朗・久美子・大雄
・灯竿・芳伸・正一・北斗・新子・久子・冬
二・恵美子諸氏。

十傑作品——(特選一を含む上位)

保護色を持たない正直者が居る 杉原 胡風

働ける喜び無色の旗を振る 同 桐原

振り向けば妻もおんなじ色を撫る桑野 澄子

ビーマンの安らぎ赤くうれてる竹内 翁童

金色の秤で神に試される 石部 明

十月の色です赤い羽根ひとつ 高木 靖子

透明な別れの色でマスカット 石田 明

父の貌茶色で描けば父に似る 光岡 早苗

限界へ独楽は悔いなき色で果つ 嘉数千代香

保護色の帽子の中の破裂音 東 おさむ

うちの人口癖となり笑われる 寿 雄

似なくても良い口癖が親に似る 弘 朗

おそが手の餅で足らぬ子の育ち 照 恵

踊り下手酒に乗じて輪に入り 碧 穂

選宮をせいで手が舞い足が舞い すえの

翼のある女の肚に蛇が居る 蒼 水

西宮北口句会 小浜牧人選

ちぎれ雲親子のように仲がいい(12才) 英 二

一つつ言葉おぼえて人氣者 摩耶子

天井へ空想追って一人寝る 正 祐

一線を越えて他人の顔でいる 半 歩

息子新築親はローンが気にかかり 千 世子

お年玉さらの紙幣を撰っておく
 新学期正當ダイヤで走り出す
 新春三日鳴りを静めていたラッパ
 新調の背広で春の恋をする
 胸上げの高さへ春の風が吹く
 胸上げもなく定年の椅子を去る
 湯豆腐がほどよく煮えた仲直り
 ふるさとは心の中に灯をともし
 人の世のあやに哀しきもつれ糸

虹川柳倶楽部(唐津市) 新潟回天子報

光年で計る宇宙の無限大
 蓮根掘り宇宙遊泳のごと足替える
 星屑にすぎぬ地球でせめぎ合い
 星一つつかめぬままに此の世去る
 貝殻を閉じ運命にさからう気
 甘茶くむ老僧わびしや花祭り
 進級の魅力で続く珠算塾
 友達は皆進級する車椅子
 後任へ社長の性格まで教え
 あの孫もこの性を進学祖母痛し
 生活の思い出拾う年となり
 進級のたびに背丈が親を抜き
 宇宙爆発庶民の智慧になし
 釈迦知らぬ児等の可愛い花車
 嬉しそう甘茶の中のお釈迦さま
 宇宙もう新婚旅行の道となり

まる々に川柳会

宮本茂児報

同窓会ニクッケーで語り合い
 どうみても名前負けのしてる顔
 呼び出しに偽名をつかった電話口
 結局は親の一字をとると決め

清川 泉女 笑人 牧女 伊升 めぐる 紅扇 総甫 喜久甫 五木 照神 広坊 実光 岩原 桑隆 久隆 愛郷 一竿 古郎 金志郎 勝一 紫浪 春吉 虹汀 回天子 瓢太

怪物の名前子供にまかせとき
 三人目名も適当につけておき
 職も変えて名前も変えてみる落目
 福笹をかたいて帰りにあり
 ブーツはきモデル脱いどりで街を行く
 春の風ブーツを脱いでたしかめる
 人並みにブーツが穿ける脚線美
 ゆうもあ川柳会 櫻谷漫柳報

別れ際殺し文句を探して
 松茸おれが来るまで顔出すな
 スープなどさめない距離も痛がゆし
 有難き知らぬ子へやるお年玉
 ライバルのミスには触れぬ煙草の輪
 鏡の方がまがつてるかと思ひ
 ふるさどがコタツの上に在りみかん
 三井が丘川柳会 高田博泉報

旅がえりパパ一番にママを呼ぶ
 女には魂こめて鏡
 作業着が一番似合っている男
 ほんとうの私を知っている鏡
 一番にびつたりついているゆとり
 姫鏡妻に二十の頃もあり
 玄関の鏡がバスにおくれさす
 廻れ右すれば僕でも一番さ
 僕の手は一番確かな機械だな
 三面鏡今朝のわたしの泣き黒子
 一番に唄つてあとは飲める肚
 一番ホーム寒々と立つ一人旅
 一番で出た東大も詐欺をやる
 僕が選んだ妻が一番美しい
 血のかようにことが一番身にこたえ

茂児 立児 好郎 一恵 千恵 星斗 絃 絃 太一郎 こそけ 絃 絃 不二 野生 度女 鬼遊 琴音 凡九郎 一恵 惠留美 惠美子 公子 博泉 三千子 三郎

スタイルの悪さを鏡のせいにする
 錆ついた心に貴女は映らない
 蛙の子で一番になる筈がない
 タクシー代今日も一番先に降り
 晴れ姿写す鏡が小さすぎ
 鏡台が協議離婚を知っている
 一番が着いて都会が動き出し
 東大を一番に出て気が狂い
 第一番大吉とあり初みくじ

京都塔の会

女運悪いと新しいのを連れて
 古稀をむかえて今知る妻の性あらた
 朝の雨夕方の雨寒に入る
 新年はふるりの味で占つつみ
 ホン酢に泳ぐ白魚の味
 炊飯器パン焼器をれでも男の不精なる
 枯葉一枚フラフラ舞うて来る焚火
 秋空へ透かして旅のラムネ瓶
 少年の明日に相づち打てぬ日も
 新しい方をセールス売りがり
 井の蓋へおしんこ乗せてくる
 片笑くは雇用テストの点になり
 娘の笑くは心配させてまたひとり
 悪役をしほも憎めぬ笑くば持つ
 悲しみの涙にも遇う笑くばです
 おたやんのえくはへ平和な日がつつき
 新しいお茶いれますと座を外す

松川杜的報
 客遊子 比呂志 箇珠 よし子 蘇芽 求堂 紫香 和友 明代 白溪子 潮花 永楽 飛鳥 誠島 拓美 杜的 水客

▼51年度各地柳壇賞(若本多久志選)は本誌
 53ページに発表しました。句数制限などで幹
 事の方々にご苦勞をかけております。

・募 集・

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

六月号発表 (4月15日締切)

川柳塔 (10句) 中島生々庵 選
水煙抄 (10句) 菊沢小松園 選
愛染帖 (3句) 橘高薫風 選
課題吟 (各題5句以内)

「洗たく」 河原みのる 選
「時 間」 植村客遊子 選
「移 住」 小幡里風 選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

七月号発表 (5月15日締切)

川柳塔 (10句) 中島生々庵 選
水煙抄 (10句) 菊沢小松園 選
愛染帖 (3句) 橘高薫風 選
課題吟 (各題5句以内)

「夜 店」 藤井一二三 選
「太 鼓」 時 広 一 路 選
「短 冊」 市場没食子 選

一人の遅稿 大ぜい困る

定価 四百円 (送料29円)

半年分 二千五百円 (送料共)

一年分 四千八百円 (送料共)

昭和五十二年三月二十五日印刷
昭和五十二年四月一日発行

大阪市南区鰻谷中之町二〇番地
編集兼 発行人 中島蓬太郎
印刷所 藤原童心社

郵便番号 542

大阪市南区鰻谷中之町二〇番地
発行所 川柳塔社
電話大阪・二七一三九八五番
振替口座大阪・三三三六八番

本社四月句会

日時 四月七日(木) 午後六時
会場 金属会館
南区鰻谷東之町10番地
電話 271・3935番

柳話
黒川紫香
(今月の出題・児島与呂志)

兼題 「摘む」
「気合い」
「新入学」
「果」

大 路 美 幸 選
野 村 太 茂 津 選
本 多 柳 志 選
橘 高 薫 風 選

各題三句以内厳守

★投句だけの方は切手百円封入

各題三句以内厳守

★電話での投句や訂正はご遠慮願います
大阪市南区鰻谷中之町20

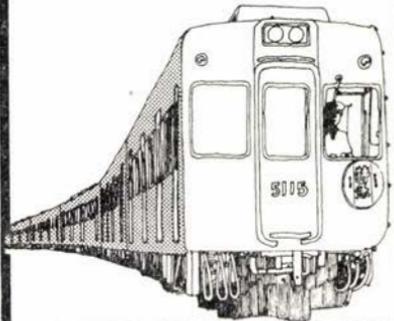
川 柳 塔 社

6月の兼題 「演技」 「手漕」 「足み」 「演放」

6月句会は7日(火)

大阪・神戸・京都・宝塚を
最も便利に結ぶ

阪急電車



・ペンペン草・

泣いても笑っても
★よいよ次号は「六百号」記念である。普及版「旅人」と増大号の二本立て編集部は文字どおり大わらわである。悔いのない仕事をしておきたい。

● 新人起用

★主幹命令で、「川柳塔」は、新人起用の縁に添ってきた。早い話が課題吟「一路集」の選者起用である。「川柳雑誌」時代は、ベテラン選者が年間三回も

▽ 葉子コーナー

▽私の家の近くに安福寺というお寺があります。このお寺は、尾張大納言徳川家の菩提寺で、参道の両側に桜の木と、岩横穴古墳があり、岩肌を切りぬいて造られた三十余の六世紀頃のお墓のアパルトです。
▽春になると桜が咲き、低いお寺の塀に花が散っている有様はとても長閑な風情です。

選をしたこともあって新人には選がなかなかまわってこなかった。ところが現在は同人の半数以上の方が本社関係の選者経験を持っておられる。

● 若手育成

★上方漫才も昨年あたりから「若手育成」に乗りだし、大阪阿倍野区のアポロビル六階で毎月一回、秋田実先生の指導で研究会を開られている。その成果は急速に上がり、わずか一年ばかりで大きい新人賞を二つも獲得した。若手コンビがあった。これが同人雑誌の場合はこのようには、テト無理である。と思う。

● 花より朝めし

★春だというのに話が固くなった。シニクやわらげよう。ボクのはのしい時間といえは食うときである。貰いのすくときである。貰いが、食卓の前に坐わらないが、か云ってオカズが良いからではない。薫風選でおなじみ

の「電波新聞」に書いたように、どんなモノでもおいしくたべるイハハヤ。だから仕事をすませて寝床へもぐり込むと、まず起きたら食えることを楽しみに寝る。(ボクは窓が白むころまで毎日仕事をしているの、朝食はヒルの一時ごろ)

★この朝食礼賛者というが、共鳴者が一人いた。それはヒットメイカーの作曲家、小林亜星氏である。テレビのなにかの番組で、「小林さんの一口で一歩たのしいのは、なんですか」という質問に「そうですね、朝ご飯を食べる時で、もう寝る時からそれがたのしくてネ」と、あの二重アゴをしやくって答えたことである。

★氏は百二十キロ以上あるようにおもうが、健康管理のため減食されているのかも知れない。ボクの場合は腹が出っ暑いて寒いや、暑い時に、寒い時に、食進むのをやめては(不二田一三夫)

姉妹品大和錦印



警察庁・警視庁
全国府県警察
大阪府警察本部
講道館・御指定

柔道衣 剣道具

早川繊維工業株式会社

大阪支店

大阪市天王寺区伶人町29番地の1
電話(779)1690~2番

昭和四十二年一月二十五日
昭和五十三年四月二十五日
昭和五十二年三月二十五日
昭和五十三年四月二十五日
第三種郵便物認可
発行(毎月一日発行)
五九九号

川柳塔

四月号

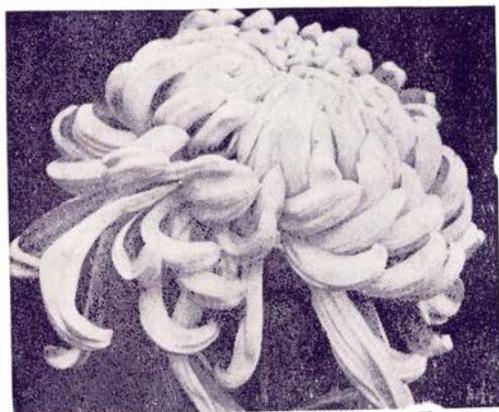
定価 四百円(送料二十九円)

美の殿堂 大和文華館

平城京をめぐる山々を一望の
静かな環境にある大和文華館
は 日本建築の特色に近代美
を生かした美術の殿堂です
収蔵品も日本・中国を中心に
国宝・重要文化財を含む 有
数のコレクションです
観覧時間...10時~17時

▶近鉄奈良線 学園前駅すぐ

近鉄



一番よい酒

うまい酒

清酒

菊正宗

宮内庁御用達
菊正宗酒造株式会社
神戸・灘・御影